

高知大学医学部
外科学講座外科1

楷風

同門会誌 第15号

2020年(令和2年)

外科学講座外科1教室の大目標

Academic Surgeonの育成

研究マインドを持った手術の上手な外科医の育成

目標達成のための三つの課題

■ 医学教育の充実

母校愛を培う医学教育

■ 良好な手術成績の達成

良好な手術成績は良好な人間関係から

■ 高知発の優れた研究を世界へ発信

すべての研究は英語論文で完結

目次

■ 巻頭言	花崎和弘	1
■ 教室員集合写真		2
■ スタッフ紹介		3
■ 新入局員挨拶	清水茂翔	3
	田中智規	3
	丸井輝	3
■ 第38回日本ヒト細胞学会学術集会		4
■ 第58回日本人工臓器学会大会		6
■ 教室の診療研究活動報告		
食道	北川博之	8
胃	並川努	9
肝胆膵	上村直	11
大腸	岡本健	12
小児外科	大畠雅之	13
ヘルニア	山口祥	15
乳腺内分泌外科	杉本健樹	15
■ 関連病院寄稿		
高知県立あき総合病院	直木一朗	17
医療法人聖真会 渭南病院	溝渕敏水	17
高知医療生協 高知生協病院	川村貴範	18
医療法人五月会 須崎くろしお病院	田村精平	19
医療法人白井会 田野病院	白井隆	20
社会医療法人近森会 近森病院	八木健	20
いの町立国民健康保険 仁淀病院	志賀舞	22
高知県立幡多けんみん病院	秋森豊一	22
社会医療法人仁生会 細木病院グループ	細木秀美	24
社会医療法人仁生会 細木病院	上地一平	25

■ イベント・Happy News	26
■ 第15回楷風会賞 受賞者	前田 広道30
■ 第15回Impact Factor賞 受賞者	並川 努31
■ 学外研修報告	
兵庫県立こども病院	藤枝 悠希32
社会医療法人近森会 近森病院	津田 晋32
社会医療法人近森会 近森病院	小松 優香33
高知県立幡多けんみん病院	川西 泰広33
高知県立幡多けんみん病院	石田 信子33
高知県立幡多けんみん病院	宇都宮 正人33
■ 学外近況報告	
高知学園大学	松浦 喜美夫34
高知赤十字病院	甫喜本 憲弘34
医療法人仁栄会 島津病院	西家 佐吉子35
久留米大学	橋詰 直樹36
■ 学生指導	37
■ 事務だより	38
■ 手術件数	39
■ 業績:論文発表・学会発表	41
■ 会員名簿	52
■ 楷風会会則	62
■ 編集後記	花崎 和弘65

「New Normal時代の学会のあり方とは？」

2020年は歴史に残る大変な1年になりました。中国の武漢で発症した「新型コロナウイルス感染症（COVID-19 infection）」はパンデミック化して世界中の人々を苦しめ、2020年11月8日現在、ジョンズホプキンス大学の集計では、世界中の感染者数は5000万人（日本10万人）を突破し、死亡者数は125万人（日本1800人）を超え、致死率は約2.5%と報告されています。北半球はこれから冬に向かいますので、益々感染者数の増加が予想されます。

COVID-19 infectionは医療現場だけでなく、他のあらゆる分野においても大きな影響を及ぼしました。学会のあり方もダイナミックにチェンジしました。不幸にも本年が学会主催に当たってしまった関係者の皆様、中でも学会長や準備委員長の皆様は忸怩たる思いを抱えながら、眠れない夜をお過ごしになられたのではないのでしょうか。

かくいう私共の教室も本年8月22日・23日に「第38回日本ヒト細胞学会学術集会」を、さらに11月12日から14日には「第58回日本人工臓器学会大会」を主催させていただきました。両方の学会とも数年前に高知での開催が決定した頃は、「2020年は東京オリンピックが開催される Olympic Yearだから大都市開催よりもオリンピックの影響が少なそうな地方開催の方がベターかもしれませんね」みたいなノリだった様な気がします。楽しみにしていた東京オリンピックが延期になり、大都市開催予定のほとんどの学会が中止・延期に追い込まれ、延期になった学会の多くが、最終的には完全webやalmost webのハイブリッド方式になるとは誰が予想したのでしょうか。まさに悪夢です。

そうした厳しい状況にもかかわらず、私どもが主催させていただいた2つの学会はいずれも「現地集合型」で遂行できたのは不幸中の幸いでした。施設の制約等があり、演者が現地にお越しになれない一部の演題（欧米からの招待講演者も含む）は「パワーポイントを使用した音声付スライド」の発表にて業績とさせていただきます。

現地集合型開催が可能だった最大の理由は、両学会とも開催地の高知市のCOVID-19感染症の新規感染者数が開催直前後も含めて開催期間中はゼロで比較的落ち着いていたということに尽きます。加えて2020年にリニューアルしたばかりの高知県では最大規模（1500席と500席の2会場を有する）となる「高知県立県民文化ホール」が会場として使用できる幸運も重なりました。それによって学会参加予想最大人数の3倍の収容人数が見込める三密を回避しやすい運営体制を取ることができたことも現地集合型開催が実現できた大きな要因です。会期中の感染対策は参加者全員の検温から始まり、三密の回避、マスク着用、手洗い消毒の励行、換気を行う等のCOVID-19感染症拡大予防対策を徹底し、感染症患者を出さないように注意深く取り組みました。入念な準備を行うためにオリジナルのCOVID-19感染症対策マニュアルを作成しました。作成したマニュアルは本年報内にも掲載していますので、ご興味のある方はご参照ください。

両学会とも開催直前の理事会において「開催地の感染状況が悪化しない限り」の条件付きで、現地集合型開催をお認めいただきました。特に第2波到来かのタイミングで開催された第38回日本ヒト細胞学会学術集会では高知市出身の四ノ宮理事長（防衛医大教授）が開催地の状況を良く把握しておられたことが幸いし、「最終責任は（理事長の）私に取りますからやりましょう」と後押しして下さったことが現地集合型開催に踏み切る大きな契機になりました。ちなみに第3波到来かのタイミングで開催された第58回日本人工臓器学会大会は、小生が日本人工臓器学会の理事長職を兼務しているため、「もし何かあった場合は理事長を辞する」という覚悟で臨みました。

いずれにしる大変なご不便とご負担をおかけしたにも関わらず現地に集合していただいただけでな



花崎 和弘

く、感染症対策にもきちんとご協力してくださった参加者の皆様には感謝の言葉以外言葉が見つかりません。皆様、本当にありがとうございました。また COVID-19 感染症も含めて的確に学会を運営していただいた学会運営事務局の株式会社キョードープラス（岡山市）の皆様にも心から感謝申し上げます。おかげさまで、両学会とも大過なく、盛況にて無事終了することができました。これも偏に学会役員・理事・評議員・会員をはじめとする学会関係者の皆様および参加者の皆様の格別なご尽力とご支援の賜物です。この紙面をお借りして、厚く御礼申し上げます。

With コロナ禍の「New Normal 時代の学会のあり方」に正解は無いと思っています。だからこそ、柔軟かつ適応力に満ちた多様性（diversity）が求められます。学会主催者および執行部の皆様が開催地の状況や学会の規模や会場の AMENITY など全ての要素を考慮し、熟慮に熟慮を重ね、叡智を振り絞った末の決断であるからです。そこに至るまでには不安で眠れない夜もあったでしょう。どの道を選択しても最後は苦渋の決断が強いられます。この苦労は将来の学会のあり方に必ず実りある成果をもたらすものと確信しています。こうした非常事態を乗り越えることによって、従来慣習化されていた学会運営の無駄を省き、経費削減や時間節約も含めた、New Normal 時代に相応しい新しい学会のあり方が生れるのではないかと期待しています。

コロナ禍により、経済は低迷し、失業者や自殺者が増加し、社会全体に暗雲が立ち込めています。1日も早いワクチンの開発と臨床応用が実現し、安全な感染症治療法の確立が望まれます。本年報が発行される頃にはワクチン投与が実施され、現地集合型開催の学会が少しずつ増加していることを切望します。

New Normal 時代、皆様1人1人のサバイバル力が試されています。生き残りをかけて様々な工夫をしながら継続できることは継続し、変更が必要なことは躊躇せずに変更していきましょう。そして逆境にめげることなく、厳しい環境に負けないで、挫けずに生き抜いて参りましょう！！

一日も早く新型コロナウイルス感染症が終息し、光輝く New Normal 時代がおとずれれることを祈念申し上げて、拙稿を閉じさせていただきます。

(2020年11月18日 文責：花崎和弘)

教室員集合写真「さくら道」



2020(令和2)年4月3日撮影

【スタッフ紹介】

〈2020年12月末日時点〉

職名	氏名
教授(附属病院顧問)	花崎 和弘
教授(医療学講座医療管理学分野) がん治療センター センター長	小林 道也
特任教授	大畠 雅之
准教授(病院教授) 乳腺センター センター長	杉本 健樹
講師(病院教授)	並川 努
講師(医療学講座医療管理学分野)	岡本 健
講師	駄場中 研
手術部講師(病院准教授)	北川 博之
特任講師(医局長)	前田 広道
助教	辻井 茂宏
助教(病棟医長)	上村 直
助教(外来医長)	沖 豊和
助教	岩部 純
特任助教	小河 真帆

職名	氏名
助教	宗景 匡哉
医員	福留 惟行
特任助教	藤澤 和音
医員(病院助教)	谷岡 信寿
医員	山口 祥
医員(病院助教)	横田 啓一郎
医員	中村 衣世
医員	前田 将宏
医員	清水 茂翔
医員	丸井 輝
事務補佐員	川村 麻由
事務補佐員	梶原 愛
事務補佐員	冨本 敦子
事務補佐員(医療秘書)	川村 香奈
事務補佐員(乳腺センター)	辻岡 織江

新入局員挨拶

清水 茂翔先生

2020年度から第一外科に入局いたしました。清水茂翔と申します。高知大学出身で高知県に住んで9年目になり、高知県での生活も慣れてきました。仕事にも早く慣れたいと思います。至らない点が多々あると思いますが、御指導御鞭撻のほどよろしく申し上げます。



田中 智規先生

2020年度より第一外科に入局致しました、田中智規と申します。初期研修は県外で行いましたが、出身大学がありお世話になった高知県に恩返しをしたいとの思いで高知での後期研修を希望しました。医師として、また外科医として一人でも多くの方々のお役に立てるように日々精進して参ります。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



丸井 輝先生

東京出身、高知大学医学部を卒業してから県立あき総合病院で初期研修を行いました。学生時代に解剖学を学んだ頃から消化器外科を志望しており、ようやくスタートラインに立つことが出来ました。知識・技術共に至らない点はありますが、丁寧な診療を心掛けていくつもりです。今後ともよろしく申し上げます。



第38回日本ヒト細胞学会学術集会

謝 辞

2020年（令和2年）8月22日（土）・8月23日（日）の2日間にわたり第38回日本ヒト細胞学会学術集会を高知市にて開催させていただきました。

会期中は本学会のメインテーマであります「ヒト細胞学研究の多様性と革新性：日本から世界へ発信するヒト細胞学」に相応しい高い見識と示唆に富む39演題の素晴らしいご発表がありました。新型コロナウイルス感染症禍での開催にも関わらず、2日間の参加者総数は106名（市民公開講座のみ参加33名を含む）と大盛況でした。明日からの研究および診療に活用できる貴重な知見が習得できたものと確信しています。加えて本学会の目玉企画として「高知が生んだ偉大な研究者が語る細胞について知ろう：人は細胞から出来ている」のテーマで行われた市民公開講座も多数の皆様にご参加いただき、誠にありがとうございました。心から御礼申し上げます。

ご存じのように本年度は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のために集合型の全国学会開催がほとんど中止または延期に追い込まれている中での学会開催でした。そのため参加者の皆様には大変なご不便とご負担をおかけし、深くお詫び申し上げます。予定参加者人数の数倍以上の人数を収容可能な大規模会場をご用意し、検温・3密の回避・マスク着用・換気・手指消毒等のエビデンスに基づくCOVID-19対策を徹底ただけでなく、例年以上の猛暑の中での熱中症対策も含めたチャレンジな学会運営に対し、皆様から格別なご理解とご協力を賜り、参加者全員が無事にお帰りになりました。心から感謝申し上げます。

COVID-19時代の学会運営方式として「所属施設の許可があつて高知会場に来られる方は来ていただく、所属施設の制約のため高知会場へ





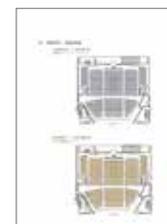
来られない方は予め提出していただいた音声付スライドを高知会場にて発表または音声の無い場合は代理人による高知会場でのスライド発表」という新しいスタイルも導入しました。

このような大変厳しい環境にも負けないで、輝かしい伝統と歴史を有する本学術集会を現理事長の四ノ宮先生の故郷でもあります高知市で初めて開催しただけでなく、お天気にも恵まれ、大過なく無事に終了できたことを大変嬉しく思います。また前田広道準備委員長をはじめとする当外科教室スタッフの獅子奮迅の活躍も素晴らしかったです。これも偏に四ノ宮成祥理事長が「最終責任は私がかかりますからやりましょう！！」と背中を押してくれ、それに賛同いただいた理事・役員・評議員・会員および参加者の皆様のおかげです。重ねて御礼申し上げます。

末筆になりましたが、皆様のご健勝とご多幸を祈念申し上げますと共に、来年こそは COVID-19 から解放された中での学術集会開催を強く願いながら、謝辞とさせていただきます。

このたびは本当にありがとうございました。

2020年（令和2年）8月23日
第38回日本ヒト細胞学会学術集会
大会長 花崎和弘 拝



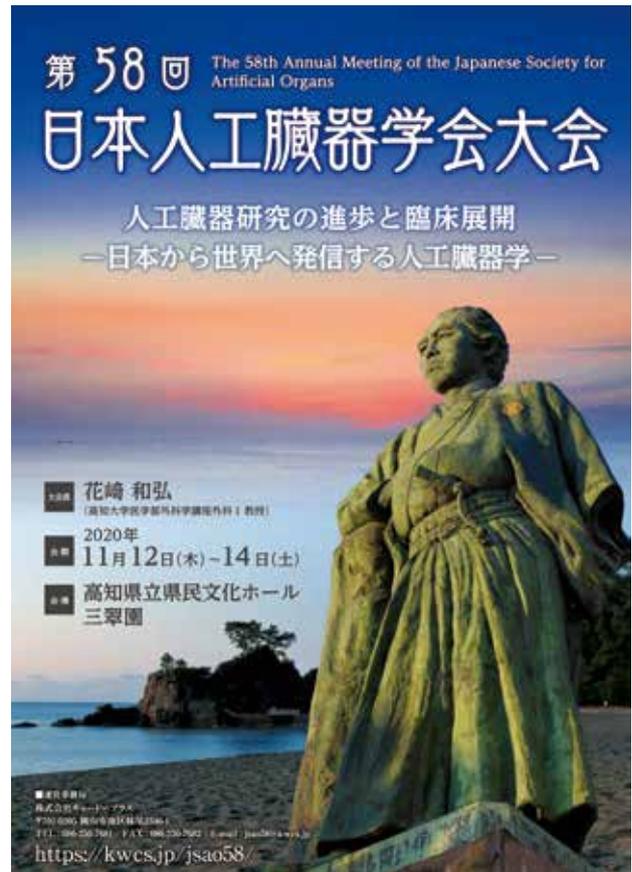
第58回日本人工臓器学会大会

謝 辞

2020年（令和2年）11月12日（木）～14日（土）の3日間、第58回日本人工臓器学会大会を高知市（高知県立県民文化ホール・三翠園）にて開催させていただきました。

ご存じのように中国の武漢で発症した新型コロナウイルス感染症（COVID-19 infection）はパンデミック化して世界中の人々を苦しめています。そうした中、本大会は「開催地の最新の感染状況から判断する」という条件付きで、直前の理事会の承認を得て、現地集合型開催とさせていただきます。施設の許可が得られないため、現地に来られない一部の発表者（欧米からの招待講演者も含む）のみ、「音声付スライドでの発表」にて業績とさせていただきます。私共が作成したオリジナルの「COVID-19 感染症対策マニュアル」に沿った学会運営に全面的にご協力して下さった皆様のおかげで、参加者全員がご無事にお帰りになりました。大変なご不便とご負担の中でのご参加にも関わらず、大会期間中は多くの皆様から生涯忘れることがない励ましのお言葉やご厚情をいただきました。本当にありがとうございます。心から御礼申し上げます。

会期中は本学会のメインテーマであります「人工臓器研究の進歩と臨床展開：日本から世界へ発信する人工臓器学」に相応しい高い見識とアイデア溢れる354演題の素晴らしいご発表がありました。幸運なことに3日間の参加者総数は予想よりはるかに多い693名と大盛況でした。久しぶりにface-to-faceでの人的交流を楽しんでいただいただけでなく、明日からの研究および診療に活用できる貴重なevidenceやknowledgeも習得できたものと確信しています。2日目に小雨がぱらつく時間帯が短時間あったものの、初日と最終日は晴天に恵まれ、「天の時・地の利・人の和」に助けられました。



教室の診療研究活動報告

食道

北川 博之

手術部所属となって

令和2年6月より附属病院手術部副部長を拝命しました。手術部運営や手術枠調整、講義などを部長の脳外科上羽教授のご指導の下、脳外科濱田先生と共同で、谷協師長に教えていただきながらやっております。手術部は附属病院の根幹をなす施設であり、最高水準の安全規格を維持するために厳密な運用が求められますが、これまで外科医として長年利用させていただいたものの、知らないことばかりで目から鱗が落ちまくります。

まず最初に教えられたことは、手術枠調整でした。手術枠調整の結果、麻酔科医師と手術部看護師を含むスタッフの勤務割り振りが決まるため、予定手術における手術室利用申し込みは正確に行う必要がありますが、恥ずかしながら今まで余り気にしていませんでした（食道手術は1日枠利用のため、後ろに他の手術が入ることもなかったのです）。しかし外科を含む複数の診療科で不正確な申し込みが多く、大変ご迷惑をおかけしていました。そこでホギメディカルさんのデータ解析を各診療科に毎月行われる手術部連絡委員会で公表してルール遵守の呼びかけを行いました。そして手術申し込み期限厳守と空室枠の公開制度を作り、空室の有効利用を促進しました。結果徐々に予定手術が予定通り終了し、緊急手術への対応もしやすくなったためか、全体の手術数が昨年以上に増加しています。コロナ禍における手術制限などを考慮すると、かなりの奮闘ではないかと思われま

す。しかしコロナ禍に対する運用の変更の必要もあり、各診療科には学生実習にもご不便もおかけしました。3蜜を避けるためと、全国的なガウン、マスク、キャップなどの資材不足のため、ロッカールームや入室人数制限を行わざるを得ませんでした。秋には感染が落ち着き供給も安定するかと思われましたが、年末からさらに感染拡大し、関東では緊急事態宣言が出されるまでになっています。今後の資材の備蓄も含めて体制を常に見直す必要がありそうです。また全国国立大学手術部協議会という組織があることを初めて知りました。今年はオンラインで開催されましたが、全国の国立大学での取り組みや高知大学の立ち位置などが明らかとなりました。令和3年度は中四国ブロックの主幹を務めることになっていますが、現状では参集型会議の開催は困難でしょうし、各校最も関心があるのもやはりコロナ対策ですのでメールまたはオンライン会議の方向性で調整をしています。

手術部としての講義も増えました。手術医学会や全国国立大学手術部協議会が作成している手術安全に関するマニュアルによって、医療安全、感染対策、医療倫理、スタッフ配置、災害対策、教育システム、設備やガス、そして産業廃棄物の取り扱いなどの勉強をすることになりました。手術部は多職種で運営される部署であり、コミュニケーションや他者尊重の立場が非常に重要であることを学びました。これらは実務を通して形成されるので講義で伝えるのは難しいのですが（しかもオンライン講義で）、若手医師や学生にも立ち居振る舞いで示すことができればと思います。

食道の診療統計

2020年の食道症例は以下の通りでした。

胸腔鏡下食道切除術：18例（咽喉頭食道全摘3例）

下部食道噴門側胃切除：2例

胸腔鏡下縦隔リンパ節郭清：1例
腹腔鏡下食道裂孔ヘルニア修復術：1例
非手術治療：17例

令和2年の食道癌手術の特徴をまとめます。

■ 表在癌症例の減少

コロナ禍の影響で内視鏡検査の受診控のためか、Stage Iは4名のみでした。
Stage I / II / III / IV：4 / 1 / 9 / 6（Stage Iの4名中、頭頸部癌 Stage IVが2名）
食事の通過障害などの症状で発見される進行癌が増加しており、2021年も懸念されます。

■ 同時重複癌の増加

結腸癌が2名、胃癌が1名、頭頸部癌が5人

コロナ禍における内視鏡受診控えのためか、嚥下困難を契機に頭頸部癌が発見され、重複癌のスクリーニング検査で食道癌を発見されるケースが増加しました。そのため食道切除術のうち、頭頸部外科、形成外科と合同で行う咽喉頭食道全摘、胃管と遊離空腸のいわゆる2階建再建が3例、食道胃全摘右結腸再建が1例と、複雑で広範な手術が増えました。

■ 高齢者の増加（手術適応の高齢化）

胸腔鏡下食道切除術18例中、80歳以上が5人（85歳以上が4人、最高齢は91歳）。
心血管系疾患を基礎疾患に有する高齢者が多く、周術期管理が非常に重要となります。
入院期間もある程度ご家族の負担を考慮して長めに説明をするようにしました。

■ サルベージ手術

放射線治療後の遺残・再発に対するサルベージ手術は2例でしたが、気管周囲の血流温存を入念に行うことで安全に施行できています。

■ ニボルマブ

2020年よりニボルマブが保険承認されました。従来の抗癌剤治療に続く新たな治療手段を得たことで、治療選択肢が広がりその効果が期待されます。一方で免疫チェックポイント阻害剤ならではの有害事象にも注意が必要です。

胃

並川 努

2020年の上部消化管の診療は、北川、岩部、横田、前田将宏、清水そして初期研修医の先生方とともに行わせていただきました。手術症例は下記の表に示しておりますが、30症例の治癒切除不能進行・再発胃癌の患者さんの治療も行わせていただいております。今年新たにHER2に対する抗体薬物複合体としてトラスツズマブデルクステカンが胃癌治療においても使用できるようになり、8系統の異なった作用機序を持つ薬物を有効活用できるようになりました。毎年のように新規薬物治療

法が開発されており、来年以降も大きな治療体系の変革が予想されています。特に、免疫チェックポイント阻害剤は臨床的に免疫療法がガイドラインに記載される治療として市民権を得て大躍進しており、がん治療の構築として免疫を中心にして考えるという世界的潮流さえ感じるようになりました。これらの薬剤を病状の変化に合わせて適切に切り替えしていき、奏効が強く得られた場合には conversion surgery を考慮するタイミングも逃さないようにマネジメントしていかなければなりません。ゲノム医療の推進とともにチーム医療のなかで多種多様な個別化治療の実現を考えていきたいと思っております。

突如として始まった COVID-19 の感染拡大は全世界の行動様式の変容を余儀なくされ、今もなお拡大を続けています。コロナ禍のなか、「新型コロナウイルス感染後の外科治療の至適時期を調査する国際的多施設共同前向きコホート研究 (CovidSurg-Week) に関する研究」に参加させていただいております。これは新型コロナウイルス感染症に罹患した患者と非罹患患者さんの間で外科手術後の死亡率にどの程度の差があるかを検証するための研究です。感染の影響により、外科手術患者さんの外科治療がどのような結果となり、感染患者さんの手術はいつ行えば安全かを知ることにより、今後より良い治療法や診断法などの開発に貢献することができるように引き続き頑張っ参りたいと存じます。

その他の研究としては、「5 アミノレブリン酸を用いた末梢血循環がん細胞の検出法確立にむけたパイロット研究」、「治癒切除胃癌 Stage III 症例に対する術後補助化学療法としての S-1+Oxaliplatin 併用療法 (Treatment using oxaliplatin and S-1 adjuvant chemotherapy for pathological stage III gastric cancer : a multicenter phase II study : TOSA trial)」、「早期胃癌に対する内視鏡的粘膜切除術における 5-アミノレブリン酸を用いた光学的診断法の開発応用」、「腸音モニタリングシステムを用いた全身麻酔下手術周術期における腸蠕動運動の解析」、「人工臓臓を用いた外科的糖尿病の新たな血糖管理法の開発と発症分子機構の解明」等に取り組み、多施設共同研究として、「化学療法未治療の高齢者進行・再発胃癌に対する CapeOX 療法の第 II 相臨床試験 (TCOG GI-1601)」、「切除不能進行再発胃癌に対するナブパクリタキセルとラムシルマブ併用療法の隔週投与法における有効性と安全性を検討する第 II 相試験 (JACCRO GC-09)」、等に参加させていただいております。

さらに、胃癌治療ガイドラインや静脈経腸栄養ガイドラインの策定にも継続して関わらせていただき、その道を牽引されている先生方のご指導を賜りながら、微力を尽くせるように頑張っ参りたいと思っております。また第 38 回日本ヒト細胞学会学術集会および第 58 回日本人工臓器学会大会の高知での開催に際しまして、準備に携わらせていただき貴重な経験をさせていただきました。

このような臨床研究、社会還元事業を含めた成果を 2020 年は学会および研究会において胃関連分野で 25 の演題、誌上で 10 編発信させていただくことができましたが、さらに新たな研究に取り組み謙虚な姿勢で高知県の医療の向上に尽くして参りたいと存じます。私たちの診療および研究が行えるのは同門の先生方をはじめ、看護師、薬剤師、栄養士、医療スタッフ、事務を含めた関連の方々のご協力、ご支援あつてのことであり重ねて御礼申し上げます。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう何卒宜しくお願い申し上げます。

2020 胃手術症例数	
開腹胃全摘術	14
腹腔鏡補助下胃全摘術	1
ロボット支援下胃全摘術	1
開腹幽門側胃切除術	9
腹腔鏡補助下幽門側胃切除術	22
ロボット支援下幽門側胃切除術	2
腹腔鏡補助下噴門側胃切除術	1
ロボット支援下噴門側胃切除術	3
胃部分切除術	8
膵頭十二指腸切除術	1
その他	13
計	75

肝胆膵

上村 直

2020 年肝胆膵グループは、昨年同様花崎和弘教授、上村直（助教、H18 年卒）、宗景匡哉（助教、H19 年卒）、谷岡信寿（病院助教、H26 年卒）に、上半期は後期研修医 清水茂翔（H30 年卒）、下半期は丸井輝（H 30 年卒）がローテートし、5 名で診療にあたりました。また、8 月には初期研修医 2 年目の山下柚子先生が 1 カ月研修を行いました（山下先生は入局してくれます！）。

肝胆膵グループの 2020 年手術総数は 139 例で、うち高難度肝胆膵外科手術は 56 例でした。

肝胆道手術	47 例
肝 3 区域切除	2 例
肝葉切除	9 例
肝中央 2 区域切除	1 例
区域切除	11 例
垂区域切除	3 例
外側区域切除	3 例（うち lap 2 例）
部分切除	14 例（うち lap 2 例）
胆管切除を伴う肝切除	3 例
先天性胆道拡張症手術	1 例
膵臓手術	29 例
膵頭十二指腸切除	12 例
膵体尾部切除（悪性）	13 例
膵中央切除	1 例
膵体尾部切除（良性）	3 例（うち lap 1 例）

胆嚢摘出	40 例 (うち lap37 例)
腹腔下肝嚢胞開窓	2 例
脾臓摘出	2 例
緊急手術	13 例
その他	6 例

この1年間は肝胆膵高難度手術数 50 例を目標とし、最終的に達成することができました。一重に御紹介を賜りました同門の先生方や地域の先生方のお力の賜物であり厚く御礼申し上げます。特に、高知赤十字病院、高知県立幡多けんみん病院の先生方には心より深謝申し上げます。

2020 年の特徴として膵癌を含む膵疾患の手術症例が 2019 年より倍増となったことが挙げられます。当院は県下で屈指の膵疾患診療施設であることを昨年の楷風会誌に報告致しました。消化器内科内田一茂教授先導の元、今後さらに症例数の増加を目指したいと考えております。

2019 年から導入しましたラパ肝につきましては 2020 年は 4 例と症例数が伸び悩みました。まだまだ、チームとしての経験が少ないため適応を絞っている状況ではありますが、引き続き安全かつ高水準の医療を提供できるよう精進する所存です。

臨床研究では、従来から行っていました人工膵臓研究の他（近々前向き試験の結果がでると思います）、免疫難病センター等と協力し下記の研究を行っています。地域から世界へ evidence を発信できるように進めて参ります。

- ・ 次世代型人工膵臓を用いた糖尿病に対しする新しい血管管理法の確立
- ・ 人工膵臓を用いた外科的糖尿病の新たな血管管理法の開発と発症分岐機構の解明
- ・ 腫瘍移植モデルにおけるサイトカインシグナル伝達抑制物質を用いた癌治療法の確立
- ・ 感染症、自己免疫疾患、癌におけるロイシンリッチアルファ 2 グリコプロテイン (LRG) の炎症マーカーとしての有用性に関する臨床研究
- ・ 膵切除における抗血栓薬服用歴が術後経過に及ぼす影響に関する研究（日本肝胆膵外科学会プロジェクト研究）
- ・ 消化器外科領域の手術施行日（曜日・季節）と手術成績の関係に関する研究（2019 年度消化器外科領域新規研究）

最後に 2021 年度は、花崎和弘教授の last year になります。花崎教授に 1 本でも多くの論文を肝胆膵グループからプレゼントできるよう精進する次第です。同門の先生方や地域の先生方には引き続き御指導、御鞭撻を賜りますよう何卒お願い申し上げます。

大腸

岡本 健

大腸グループ診療研究活動

2020 年の大腸グループは、今まで通り小林道也（医療管理学教授）をスーパーバイザーとし、3 月までは岡本・前田広道・福留・藤澤・山口の 5 人体制、4 月から 9 月までは丸井、そして 10 月からは前田将宏が加わり 12 月時点では 6 人体制で診療を行っています。このため、並列での手術も可

能になっております。研修医は國則誠宏（9月）、安崎恵理（10月）にローテートして頂きました。

2020年の大腸グループが担当した手術症例は昨年より27例増加し198例でした。大腸悪性疾患は93例（2例増加）で例年のごとく9割弱を腹腔鏡で行いました。岡本は直腸癌に対するロボット手術を開始し13例執刀しました。繊細な手技は確かにロボット手術で可能になりましたが、まだまだ腹腔鏡下手術のほうがストレスは少ないと感じているのが現在の立ち位置です。一般的に言われているのが、ロボット手術に慣れてくるとストレスが少なくなるということです。2021年でそうなるように精進します。前田、福留は内視鏡外科学会・技術認定医（大腸）の資格取得予定でしたが、かなわず現在さらに精進中（全集中）です。後に藤澤、山口も待機しています。先述しましたが並列手術も可能になってきてますので、症例数増加には対応できます。責任をもって患者さんに安全で質の高い医療を提供しますので患者さんをご紹介いただければ幸いです。

来年は統合外科として新たな年報になる予定ですので外科1の年報（楷風）は今号（第15号）で終了となります。統合外科としてさらに発展する予定ですが、その中で大腸グループも基本理念（無理せず怠けず）はかえず変化に対応しながら日々の診療、研究、教育を行ってまいります。以下、現在進行中あるいは2020年に行なった多施設臨床試験です。今後ともよろしく願います。（敬称略）

■ 進行再発二次治療

1. FOLFOX plus panitumumabによる一次治療抵抗または不耐となったRAS wild-type、切除不能進行・再発大腸癌に対する2次治療としてのFOLFIRI plus panitumumab療法の有効性に関する多施設共同第II相試験—Liquid Biopsyによるバイオマーカー発現の変化と抗腫瘍効果についての検討—（PBP study）

■ 前向き臨床研究

1. 後期高齢者低位直腸癌（高リスク pT 1、低リスク pT 2）に対する準標準的治療を評価する多施設共同前向き観察研究
2. 腹腔鏡下直腸癌術後性機能障害に関する多施設前向き観察研究（LANDMARC Study）

■ 後向き臨床研究

1. 腹腔鏡下直腸癌切除における技術認定医手術参加の有用性に関する検討（EnSSURE study）
2. 内視鏡外科手術の多施設データベース構築

小児外科

大島 雅之

2020年1月から12月の小児外科グループの手術数は91例（鏡視下手術40例）となり前年と比較して20%ほど増加しましたが、4月以降はCOVID-19の影響による夏休みの短縮などから年後半の手術件数は例年の7割程度となりました。昨年20例に激減した鏡視下手術は例年の40例までに回復していますが、新生児手術は院内での分娩数が20%ほど減少したこともあり2例にとどまりました。

東西に長く交通インフラが十分でない高知県では県央の高知大学受診には患者・家族の負担が大きいため2015年9月から幡多けんみん病院（宿毛市）と県立あき総合病院（安芸市）に小児外科外来を新設し、近隣施設からの小児外科疾患の診察と術後のフォローアップを行っています。手術症例については、地域連携での術前検査データを共有することで県央の患者と同様の期間で治療を行えるよ

うになっています。2016年からの外来受診数の増加は、重症心身障害児への外科的サポートと小児の排便障害・慢性便秘治療を積極的に行うようになったことが寄与しています。現在は一般小児外科外来で診療していますが、今後患者数の増加に伴い、専門外来開設も考えています。

2021年4月から藤枝悠希先生が2年間の兵庫県立こども病院の研修を終えて高知大学病院小児外科に復帰します。それに伴い週に午前中2回の外来を3-4回に増やす予定としています。外来受け入れ患者数には十分余力がありますが、受診数は5年間で2倍となり待合での混雑が見られるようになりました。一般外科外来の一室を利用した診察では患児や家族が成人に混ざっての待合となるうえ、小児科と並診するご家族には移動による負担が大きく、2021年4月から小児科外来に小児外科外来を新設することになりました。ベビーカーや車椅子が無理なく入る診察室となるだけでなく、プレースペースや哺乳室などの小児外来の機能が使えるようになります。小児科と並診する患児の情報共有や病態の相談などが迅速に行えるようになり、患者サービスがさらに向上することが期待されます。

現在2つの臨床研究を進めています。

1. 便色認識アプリケーションを用いたフィールド実証研究

BAの早期スクリーニングとして簡便性、低コストの面から便色カラーカード(CC)の利用が国内・海外では広く用いられています。便色CC法では児の便をCCと比較するため肉眼では微妙な色調・色彩の区別が難しく、正常便と思われた児からのBA発症が問題となっています。便色認識アプリケーションはAI(人工知能)を応用した技術で便色判定できないかとのアイデアで2016年に基本プログラムが聖路加国際大学免疫学センターで開発されました。私たちは聖路加大学との共同研究でこのプログラムを利用した便色健診システムを立ち上げ2018年の科研費に採用され、2018年11月に高知大学倫理委員会から承認を得ました。新たに開発したアプリケーションを組み込んだタブレットコンピューターを用いて新生児・乳児健診で便の撮影を行う実証研究を2019年1月から開始し、高知大学、県立あき総合病院、幡多けんみん病院、高知ファミリークリニックの4施設で運用しています。

現在1500例に行われ、期間中に胆道閉鎖症1例が発見されています。またAI診断の問題や欠点明らかになりつつあり、今後の改善への検討を行っています。



2. オラネキシジングルコン酸塩を用いた小児術野消毒の臍内細菌に対する効果についての検討

本邦で開発された最も新しいオラネキシジングルコン酸塩（オラネジン）消毒薬は無色透明でポピドノードやヘキシジンと効果に遜色なく従来の消毒薬で効果が少なかった細菌への効果が期待されています。小児外科手術では鏡視下手術の多くで臍部アプローチを利用することが多く、今回オラネジンの臍窩への消毒効果に特化した臨床研究を2019年8月の倫理委員会の承認を得て開始し、現在も進行中です。

[手術件数] 小児：91例（鏡視下手術：40例）

ヘルニア

山口 祥

2020年のヘルニアグループは、山口をはじめ医局の若手医師を主軸に診療をして参りました。前年度に引き続いて藤澤先生、横田先生、前田将宏先生そして今年度入局された清水先生、丸井先生も加わり、より活気のあるチームとなりました。しかし昨今の新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、病棟改修によるベッド数の減少、手術室の手術枠管理も厳格にせざるを得ない状況となり、当科の方針として治療を急がない良性疾患の手術を制限する時期がありました。ヘルニアはまさにその最たるもので、症状の軽い患者さんには説明をして手術を数か月待っていただく、といった状況も度々発生しました。しかし多くの先生方のお力添えもあり、手術件数自体は44例と昨年より10例少ないものの、腹腔鏡下手術も20例を超えて行うことができ、大きなトラブルなく運営することができております。

今後の情勢がどうなるかはわかりませんが、コロナ禍での良性疾患の外科診療について、私たちは考えていかなければいけない局面にきていると思います。本年も患者さん・スタッフの安全に配慮していきつつ、よりよい診療を提供できるよう務めて参ります。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。

[手術件数] ヘルニア：44件（鏡視下手術：22件）

乳腺内分泌外科

杉本 健樹

2020年、乳腺内分泌外科の診療は乳腺センターを中心に杉本、沖、小河、中村（岡田）の4人に、手術および病棟業務の支援を駄場中から受け、週1回半日いずれの病院の船越の支援を受け穿刺吸引細胞診を入れると年間200件を超す針生検の大部分を担当してくれています。

昨年は、新型コロナウイルス禍の中、学会・研究会や学会関連の委員会等がWeb開催となり、スタッフの出張不在がなく外来・手術日をほぼフル稼働となりました。そのため、手術症例もかなり増加して、原発乳癌の手術症例が130例を超え、例年の3割増しとなりました。また、2019年8月のアラガンショック（インプラント関連未分化大細胞リンパ腫の発症に関わるとして日本で唯一保険承認を受けていたアラガン社のテクスチャタイプの乳房インプラントが出荷停止・発売中止となった）以来、停滞していた乳房再建術も、スムーズタイプの保険収載に続き他社のマイクロテクスチャタイプの新規参入などがあり、10月頃から徐々に回復の兆しを見せています。

また、ここ数年次々と保険収載された分子標的薬(mTOR阻害剤, CDK 4/6阻害剤, PARP阻害剤,

免疫チェックポイント阻害剤)に加え新規抗HER 2薬のトラスツズマブーデクルステカンの登場や、術後補助療法としてのトラスツズマブーエムタンシンの保険収載など抗HER 2剤の適応拡大があり、ますます、多職種でのチーム医療が必要となっています。このような状況に対応するため乳腺外科、形成外科、腫瘍精神科医、薬剤師、看護師(外科外来、外来化学療法室、乳癌認定)、MSW等多診療科、多職種が集まるカンファレンスを昨年も週1回継続しています。

臨床遺伝診療部では4月に田代認定遺伝カウンセラーが復職しました。ちょうど同月に乳癌・卵巣癌既発症者に対する遺伝性乳がん卵巣がん(HBOC)診断目的の遺伝学的検査やリスク低減の乳房切除や卵管・卵巣切除が保険収載されましたが、臨床遺伝診療部、乳腺センター、婦人科との協調体制の下、倍増した遺伝学的検査や予防手術にも滞りなく対応できています。また、月1回の多診療科(乳腺内分泌外科、循環器内科、産婦人科、小児科、泌尿器科、耳鼻科、病理等)・多施設(高知医療センター、国立病院機構高知病院、県立あき総合病院、伊藤外科乳腺クリニック、くぼかわ病院等)の医師による遺伝カンファレンスに福山医療センターと多度津三宅病院の乳腺外科医各1名が参加するようになりました。今後も診療科・施設を超えて、そして地域を超えて遺伝性疾患の情報共有を行うと同時に臨床遺伝専門医の育成に努めていく所存です。

がんゲノム医療センターでは、2019年6月から保険適用となったがん遺伝子パネル検査を、同年12月から本格的に開始し、昨年4月からは専門家会議を行う拠点病院が岡山大学病院から四国がんセンターに変更になりましたが、癌腫・診療科を超えて多数の依頼を受け40件を超す検査を施行しました。説明に長時間を要し、煩雑な事務処理を要するがん遺伝子パネル検査が順調に件数を伸ばせたのは、がんゲノム医療コーディネーターの3名の看護師の事前説明や診療科との連携コーディネーター、そして、本センター立ち上げから尽力してくれた前田広道医師と産婦人科の泉谷・樋口両医師が説明と同意取得に治療を担当する診療科の医師と一緒に積極的に取り組んでくれたことが大きく貢献しています。

新専門医制度の下では、乳腺外科専門医の育成には拠点となる大学で最低年過100例のNCD登録が必要ですので、多角化する乳癌診療、遺伝診療、がんゲノム医療を発展させながら日々の診療のパフォーマンスを落とさないように一丸となって取り組んでいきます。

[手術件数] 乳腺：195件

関連病院寄稿

高知県立あき総合病院

直木 一朗

平成24年4月に県立安芸病院から県立あき総合病院へ移行し、真新しさはすっかりと無くなりある意味落ち着いた病院になってきたように思います。私は平成8年10月に赴任し現在まで24年を超え同病院に勤務しておりますが、同年代の医師が同一病院でこれほどの期間勤務をすることは最近では珍しい事かもしれず、より地域や病院そして医師としての自身について感じ考える機会も多かったように思われます。

赴任当初は先輩医師の診断や技術を見て覚え、次第に自身の力の向上を感じつつ従事しておりました。緊急手術以外でも、IVRや内視鏡処置、また重症疾患に対する薬物治療など、殆どの疾患に対して他院のお力をお借りすることなく自己完結的に治療が行われておりました。しかしその後医師の減数などもあり、特に救急疾患の患者様など対応困難な症例が増加し、大変申し訳なく感じながらも他院の先生方のお力をお借りする機会も増えていきました。患者様にとりましては、迅速に適切な治療が行われます事は好ましいことではありますが、特に外科的診療に関しましては一度減退した力を回復することは容易でなく、またこのような悪循環は手術部門や病棟部門でも感じられるようになりました。ただそうした状況の中でも、同僚の医師と医局の垣根を越えた素晴らしい関係が築く事ができ、また特に大学病院のご協力もあり他科勤務医も増加することで、モチベーションを維持することが出来たと思います。

以前から当院では高齢の患者様の診療機会は多かったのですが、最近よりその傾向が増してきた印象を受けております。日常的に高齢者の手術が行われ、また誤嚥性肺炎や骨折、脳疾患などによるADLの低下に起因した疾患の処置を行う機会も増加しています。癌診療に関してましても、手術以外に化学療法や緩和ケア・在宅ケアそして地域連携など、中央の規模の大きな病院では分業で行われる医療の提供も、外科単科で求められる機会も増加しております。そのため、当院のような地域の医療機関においては、先端技術を駆使した手術や治療を行うことは今後も困難ではあるものの、総合医としての外科医の役割は増していくものと考えております。

医療法人聖真会 渭南病院

溝渕 敏水

外科学の近況とこれからの10年について

近年、全国的に外科医を志す若手医師が減少し、高知県も同様に減少しており、外科領域医療の今後を危惧しております。外科医の本分は手術であります。手術も鏡視下手術がメインになってきており、基幹病院での手術が増えているのが現状です。そうすると、地域での手術が減少して外科医の必要性が低くなっているように思われます。しかしながら、現状はそうではなく、地域での外科医の必要性は非常に高いのです。全身麻酔の手術が外科医の役割と思われがちですが、地域では外来小手術などが山のようにあるのが現実です。例えば、外傷や皮下腫瘍、膿瘍形成など多岐にわたります。病棟処置もしかりです。術前術後管理を行う上で、病棟での処置や手技なども多く、地域では必要な手

技となってきました。

現在の専門医制度より、症例数の確保は必須です。しかしながら、高知県では全身麻酔の手術症例が限られており全身麻酔での手術のみでは専門医更新のための症例数確保が厳しいのではないかと考えます。外来での小外科手術なども専門医取得や継続の必要症例数に入りますので、症例数を稼ぐ意味でも地域の病院に短期間でも良いのでローテーションで回ることをお勧めします。

今後の外科領域の担い手を増やしていくためには、外科領域の魅力を発信することも大事ですし、現在の外科医が手術など以外にどのような職場でどのような役割で仕事をしているかを伝えていくことが必要ではないかと思っております。(セカンドキャリア的な)

いずれにせよ、外科医が増えてくれないと外科的治療を行えなくなってくるので、どうすれば若手医師が外科医を目指してもらえるのかを全県下の的に考えていければと思っております。

高知医療生協 高知生協病院

外科 川村 貴範

昨年中は大変お世話になり、ありがとうございました。

さて、昨年の楷風会誌に投稿した文章を振り返ると、「比較的落ち着いた1年だった」と書いていました。まさか、その数ヶ月後に新型コロナウイルス感染の流行が起こるなんて……。書いた頃は中国で新型コロナウイルス感染症が発生したというニュースが流れていた頃だったような気がしますが、1年後の今もまだ世界中が感染の真っ只中にいるなんて想像もしていませんでした。結局はこの影響で、研究会や学会、懇親会、職場や友人達との飲み会も一切なくなり、外部の先生方との交流も激減しました。中小病院での外科医療では、大きな外科医療の流れを知らながら、可能なことは遅れないように勉強しつつ医療に取り組むことが必要だと思いこれまで頑張ってきました。しかし、今の状況ではこれまで以上に耳を傾けていないと情報が入ってきません。秋頃より可能な範囲でWEB講演会など聞くようにしました。しかし、実際に人と会って、話をして得られる物にはかなわないような気がします。現場でも、高齢者の患者さんは、人との交流が減って身体的・精神的に体調を崩す人が多くいます。人と人との交流は本当に大事な物なんだと今更ながら痛感しています。

それでも、外科医療に関しての新しい情報は発信されています。これまで以上に情報を収集することを怠らないようにしないと取り残されてしまいます。今の状況に正直、不安も感じますが、前向きな気持ちだけは忘れないようにしたいと思います。

県外にいる子供達とも会えず、5月の連休中には家族でオンライン飲み会をしました。それなりに楽しかったのですが、結局、夏も正月も帰ってこれず会えないままです。やっぱり、会ってゆっくりと色々話をしたいですね。医療に携わる身として、世間一般では県をまたいで移動、旅行は許される状況となったとしても、そう簡単に県外への旅行は行けません。そのお陰で(?) 昨年は高知県内のこれまで行ったことの無かったところを色々と巡ることができました。まだまだ行ってないところはたくさんあります。先の見えない今年はまだ一度高知を再発見する機会と捉えて日々の楽しみとしてみたいと思っております。

今年もどうかよろしくお願い致します。

旭日双光章を受賞して

皆さん、明けましておめでとうございます。昨年は新型コロナウイルス感染が世界中に拡がり、大変な一年でした。日本国内でも、昨年11月から第3波が襲い、医療供給体制が逼迫し、今年1月8日首都圏では緊急事態宣言が再発令されました。今後他の地域への拡大が予測されます。何とか早く、収束されることを願っています。



さて、私事ですが、昨年4月29日発令の春の叙勲に際しまして、図らずも「旭日双光章」を拝受いたしました。この度の受賞は、長年にわたり高幡地域における、救急医療をはじめとする地域医療や保健衛生の発展のために微力ではありますが、ひたすら頑張ってきたことが評価されたものと考え、身に余る光栄と思っています。

1985年（昭和60年）、救急病院のなかった高幡地域で、救急医療をやりたいという思いで、「須崎くろしお病院」を開設して35年になります。この間、山あり、谷あり。いろんな事がありましたが、何とかここまでやってこれたのも、須崎市を中心とする高幡地域の皆様方、高知県医師会、高岡郡医師会の皆様方、医師派遣などバックアップ頂きました高知大学の各医局の先生方、そして何より毎日一緒に仕事をしてきました医療法人「五月会」のスタッフの皆さん、そして家内をはじめ家族のもの達など、多くの方々のご協力とご支援のお陰であると、心からお礼を申し上げます。

本来ならば、5月7日に高知県庁で伝達式があり、5月13日に皇居において天皇陛下に拝謁する予定でしたが、新型コロナウイルス禍のため、すべて中止となりました。はなはだ残念ではありましたが、致し方ありません。結局、5月27日高知県医師会全理事会の席で、岡林会長から、勲章を初めて拝受いたしました。

今回の叙勲で終わりではなく、今後も高幡医療圏の中で、当院の特長を生かした医療、救急を中心とした急性期医療、きめ細かなりハビリテーション医療、訪問看護を中心とした在宅支援医療、そして緩和ケア医療を柱に、地域医療の中核としての役割を果たしていきたいと思っています。

新型コロナウイルス感染に関しましても、当院は昨年3月から、発熱外来、軽症患者の入院受け入れなど、県行政からの要請を受け、対応しています。感染防止策を十分にした上での抗原検査やPCR検査、病棟の一部を分離した入院対応など、通常医療とは違った心身ともに過重なプレッシャーの中で、職員の皆さんは頑張ってくれています。まさに私の誇りとするところです。



昨年大晦日の紅白歌合戦で、国際宇宙ステーションの野口聡一さんからメッセージが届きました。この国際宇宙ステーションは、一日に地球を16周するそうです。そして、「日は必ず上る」とおっしゃいました。

夜明けのない夜はありません。新しい生活様式を実践し、治療薬、ワクチンの開発により「必ず夜明けはある」事を信じて、今年一年を頑張り抜きましょう。



令和2年秋の叙勲 ～“旭日双光章”を受章して～ 2021.1

令和2年度秋の叙勲・旭日双光章を受章しました。皆様に感謝致します。

楷風会の会員の皆様、新年明けましておめでとうございます。

令和2年は日本だけでなく世界中を巻き込んで新型コロナウイルス感染が拡大し、多くの人々の命を奪い世界中の日常をも奪いました。



そのような状況下ではありましたが、私は光栄なことに令和2年秋の叙勲を授与されました。令和2年のことではありますが、花崎教授からの依頼をいただきましたので、旭日双光章受章について受章理由なども記載したいと思います。厚生労働省関連の令和2年秋の叙勲受章者は全国で477名、そのうち旭日双光章は112名、高知県の受章者は37名で、そのうち旭日章は14名。私は14名の中の1人で、保健衛生功勞として旭日双光章を10月27日（火）に閣議決定、11月3日（火）発令により授与されました。本来であれば、皇居で天皇陛下から勲章、勲記の伝達を受けるのですが、新型コロナウイルス感染予防のため、私達14名は共済会館で濱田知事から勲章、勲記の伝達を受けました。その後、知事と記念撮影、そして、知事から祝辞をいただきました。

式典が終了してから、私は妻とはりまや橋近くの写真館に寄って、珍しく2人だけの写真を撮りました。受章理由としては救急医療、地域医療を35年間、高知県医師会理事を20年、副会長を4年、安芸郡医師会会長を12年務めたことなどが評価されたものと思われます。高知新聞、読売新聞の取材の時にも話したのですが改めて考えると、家族の支えがあったからであり、病院職員の協力があったからだと思います。また楷風会、医師会の諸先生方のご指導のお陰と感謝しています。令和3年1月4日の新年の挨拶の席でも職員に感謝の気持ちを伝え、皆で勲章、勲記と一緒に記念撮影を行いました。伝達式での濱田知事の挨拶は、かつての叙勲はお疲れ様でした、これからはゆっくりして下さいと言う意味合いがありましたが、現在の長寿社会においては叙勲を契機にもうひと頑張りもふた頑張りもしていただきたいという様な内容の話でした。

私は4月に悪性リンパ腫が判明し、入退院を繰り返す、叙勲の時は、外来通院で放射線治療を続けている時でした。順調であれば令和3年3月ぐらいから外来診療なども始めることが出来るかと考えています。知事の挨拶にもあったように、長期休業の後ですが、もうひと頑張りしようと考えています。コロナ感染に対する不安が少しでも早くなくなり、安心して社会活動が出来るように、我々もワクチン接種に可能な限り協力して明るい新年、明るい令和3年にしていきたいものです。

高知の魅力

私が近森病院に初めて赴任したのは平成4年でした。以後、出たり戻ったりはしましたが、高知での生活はあわせて20年になります。私は東京出身で群馬大学の卒業であり、高知とのご縁は医局の

関連病院としての近森病院だけでした。ちなみに近森病院と群馬大学は昔からつながりが強く、消化器外科のみならず脳神経外科・救急科の医師には、今でも多くの群馬大学出身者がいます。それだけ私と同様に近森病院や高知に魅力を感じた人が多かったということです。そこで改めて高知の魅力について考えてみました。

①自然豊かでおいしい海・山・川の幸がたくさんある

高知には多くのおいしい魚介・肉・野菜・果物（とくに柑橘類、個人的には「ぶんたん」最高）があり、2007年にリクルートが行った全国アンケートでは、おいしい食べ物の多い都道府県ランキングで1位をとったこともあります。（この結果にはいささか世間で疑問符がうたれたようですが…）

②気候が温暖で過ごしやすい

高知は桜の開花で全国トップを競う温暖な気候が魅力ですが、高知に来て一番思うことは、強い風が吹かないことです。台風は別として、高知県は中国山地・四国山地にさえぎられるためか、冬の寒い北西からの季節風が吹きません。全国には至る所に「からっ風」「六甲おろし」などと名前の付いた強い北風が吹いており、群馬の「赤城おろし」を体験している私には、高知は天国のような土地です。それから活断層の関係と思いますが、関東地方と比べて地震を体感することがほとんどありません。（いずれ大きなのが来るのでしょうか…）

③活気のある人が多い

初めて高知に来た日の夜、引っ越しの荷を少し整理した後ふらりと近所の居酒屋に入りました。一人だったのでカウンター席に座って注文をしていると、背後の畳席で飲んでいた2人のお客が喧嘩を始めました。大声で罵り合っているように感じました。来て早々とんでもない場面にアウトしたと慌てていると、次の瞬間2人は大声で「ワッハッハー」と笑い出しました。なんと楽しく語り合っていたのです。高知の人は議論好きといえますし、土佐弁は少し荒々しいけれども明快な言葉です。これがそれまでの私の常識からかけ離れた「第一土佐人発見！」でした。

魅力ある土佐人といえば坂本龍馬ですが、その龍馬を世に広めた司馬遼太郎の本の一節に「土佐藩（高知県）は魅力的である（中略）天性ともいべき自由児が多かった」とあります。中央に居続けていると発見できないような客観的な目線、自由で多様な発想、明快な表現力が世の中を変えていく力になるのかもしれませんが。

医療においても何事においても「グローバル化」といわれるこの時代にあり、北には険しい四国山地、南には広大な太平洋、東西には船路をも阻むような室戸岬と足摺岬に囲まれた高知県。私は時に感じる、その「ガラパゴス的」な部分に最も惹かれているのかもしれませんが。

●手術件数調査票（2020年1月～12月）

	手術件数	（鏡視下）
甲状腺	3	0
乳腺	6	0
肺、縦隔	38	38
食道	1	0
胃、十二指腸	64	39
肝臓	25	3
胆道	115	106
膵臓	16	0
脾臓	2	1
虫垂	61	58
ヘルニア	79	21
イレウス	15	1
小腸	43	2
大腸	112	58
肛門	54	4
小児	0	0
その他	19	6
合計	653	337

外科学についての近況とこれからの10年について

2020年のトピックといえば、残念ながら新型コロナウイルスの流行でした。長期間の休校や社会的な活動の規制は、「本当に大切なことは何か。」ということのを改めて考えるきっかけとなりました。

仁淀病院は、長年当院を支えてこられた松浦喜美夫先生が退職され、新たに内科の竹原紀秀先生を病院長に迎えるとともに、私が副院長を拝命しました。正直、「いの町も思い切った人事をしたな。」と思いましたが、せっかくいただいた権限ですので惜しみなく振るっていき所存です。副院長になってよかったことの一つは、病院に関するお金の情報を広く閲覧できるようになったことです。宗景絵里先生に言わせると、私は会計マニアだそうです。現金出納帳や会計報告を分析して、お金の流れに理由をつけたり予算を立てたりするのは趣味の領域なので、お休み前の3時間とか、休日の午前中とかに楽しんでいます。いつかきっと、病院運営にも役立つときがくるでしょう。

さて、私はこれまで、外科領域での男女共同参画の推進をテーマとして活動してきました。理論の上では、男女共同参画の概念はダイバーシティに発展し、多様性を受け入れ広く人材を活用することで、生産性が高まるという考え方がコンセンサスを得ています。しかし実際の職場は、まだまだ合理的でなかったり、なんなら合法でなかったりすることもあるようです。私は、大学の最も重要な責務は、教育だと考えています。医師も住民もハッピーな県になるために、必要とされる水準を満たした外科医を、必要数養育できる土壌が必要です。これから先の10年は、後輩に対して、多彩なキャリアプラン、適切な指導、正当な報酬を提供できる環境を、一つずつ整えていきたいと思っています。

最後に皆様にお伝えしたいことは、私は毎日楽しく働いて幸せを感じているということです。もちろん仕事も私生活も嫌なことはありますが、それ以上に、毎日学ぶことがあって、人の役に立てることがあって、尊敬できる仲間がいて、家族が健康であることが、幸せだと感じています。なので、皆様もぜひ、ご自分が幸せだと思えるように、仕事をしていただければと思います。



高知県立幡多けんみん病院

診療部長 秋森 豊一

2020年初頭から新型コロナの流行で新型コロナ受け入れ病院として暗中模索しながら業務をおこない、院内クラスターも起こすこともなく過ごすことができました。外科の仕事は減ることもなく、手術件数もここ数年で最も多く、スタッフみんなの努力で大きな問題もなく新しい年を迎えることができました。さらに、緊急手術を含め全手術症例の約8割強が鏡視下手術（胆摘、虫垂切除、食道癌、大腸・直腸癌は100%）と数年前から大きく変わってきました。その甲斐もあり、終末期も診る地域の病院ではありますが平均入院日数も術後合併症数も減少しました。

2020年当初は秋森、桑原、川西、石田の4人体制でスタートし、4月より宇都宮先生の赴任で5人体制となりましたが、マンパワーの不足分を初期研修医の力も借りて多くの手術をこなして来られました。

川西先生は術者120例、手術経験220例（乳腺、胃、大腸、肝胆膵、すべての領域の癌の手術を

執刀)、石田先生は術者 147 例、手術経験 260 例(胆摘は術者として 50 例/年を超えました)そして胃、大腸の術者も行うようになってきています。宇都宮先生も術者 64 例、手術経験 120 例と増えてきており、これから胃、大腸の術者を増やしていく予定です。

また最近増加傾向にある食道・胃接合部癌胃癌、噴門部胃癌に対し噴門側胃切除(+脾摘、+膈体尾部切除脾摘)での上川法(観音開き法)再建も症例に恵まれ、2020 年は 10 例に行い、トラブルなく新しい再建法として定着することができました。

化学療法からの conversion operation も適応があれば積極的に行い、良い成績が出ています。(特に HER-2 陽性のもの)

手術指導としては、手術戦略の立て方、アプローチの仕方、術野の展開、解剖・層の認識、ランドマークの同定等を確実なものとして理解してもらい一緒に手術をしています。

直腸手術においては層を視認、神経を温存することで誰が術者であろうと排尿障害はほぼ 0 になりました。

新しいことも積極的に取り込んでいき、若い先生方に経験・技術として身につけていただこうと我々(秋森、桑原)も精進しています。

4 月から病棟編成で外科と消化器内科がワンフロア(6 階病棟)となり、消化器内科の患者さんにも目が届きやすくなり、診断の段階から介入することでスムーズに治療に移行することが可能となりました。病棟スタッフは出入り(検査出し、手術出し等)が激しく大変そうですが頑張ってくれています。

外来延患者数 8702 人(1 日あたり 36.1 人)、入院延患者数 8859 人(1 日あたり 24.2 人)

平均入院日数は 2018 年の 15.8 日から 2019 年は 13.3 日、2020 年は 12.4 日と短縮しています。

スタッフも増えたこともあり、救急も昼夜を問わず積極的に行い、幡多での完結を目指しています。

(手術療法)

消化器全般(乳腺、食道、胃、小腸、大腸、直腸)、肺、肝胆膵、副腎、肛門、ヘルニアなどを中心に手術療法を行っています。

2020 年、全身麻酔手術 509 例(鏡視下:390 例)、内緊急手術 134 例(鏡視下:121 例)

悪性疾患は 179 例(乳腺 40 例)(鏡視下:120 例)

その内訳は食道 5 例(鏡視下:5 例)、胃・十二指腸 35 例(鏡視下:31 例)、小腸 3 例(鏡視下:3 例)、大腸・直腸 69 例(鏡視下 69 例)、肝・胆・膵 22 例(鏡視下:7 例)、転移性肺癌 3 例(鏡視下:3 例)、副腎転移 2 例(鏡視下:2 例)でした。

良性疾患は 301 例で、胆嚢疾患 101 例(鏡視下:101 例)、ヘルニア(そけい、大腿、閉鎖孔、腹壁癒痕) 59 例(鏡視下:42 例)、急性虫垂炎 43 例(鏡視下:43 例)、消化管穿孔、バイパス術、腸閉塞などでした。

鏡視下手術は 390 例/469 例(乳腺を除いて全体の 83%)と増えており、桑原 Dr を中心として消化管の良性悪性、肝胆膵疾患をはじめ、バイパス手術、審査腹腔鏡、緊急での消化管穿孔、虫垂炎、ヘルニア等も可能な限り鏡視下手術を行っています。

また鏡視下手術のデータは病院のサーバー内に取り込んで随時見直しをおこなうことで、手術手技の検討を行っています。

(化学療法)

化学療法は術前、術後、補助化学療法と消化器癌の治療としてガイドラインに沿って積極的に行っ

ています。また、薬剤部、化学療法室Ns、外来Nsと情報共有し、患者さんのニーズにあわせて治療計画表に従って副作用の防止に努めながら実施しています。

1年間の外科での化学療法の内訳は新規導入化学療法86人、レジメン数42でした。

分子標的薬、免疫チェックポイント阻害剤等、新しい治療薬についてもその効果と安全性を確認したうえで、積極的に取り入れております。

(緩和医療)

当院は高知県の西南端に位置し、高齢化、人口減少の問題を抱えています。その二次医療圏における中核病院として平成24年4月1日より地域がん診療連携拠点病院の指定を受けました。地域には緩和ケア病棟やホスピスはなく緩和ケアに関しても当院が中心となって周辺医療機関との連携で患者さん・家族の要望を満たす必要があります。

当院での緩和ケアに関しては、まだまだ満足のものではありませんが、疼痛コントロール、精神的なケアなど、病棟スタッフや緩和ケアチーム、退院調整部門、地域連携チームの助けを借り、地域の病院や訪問看護ステーションと連携をとりながら、患者さんやその家族の方々が身体的、精神的に落ち着いた時間を過ごしていただけるように努力しています。

(カンファレンス)

外科スタッフ全員が入院患者の主治医として毎朝カンファレンスを行い、患者さんの状態の把握、治療方針の検討を行っています。

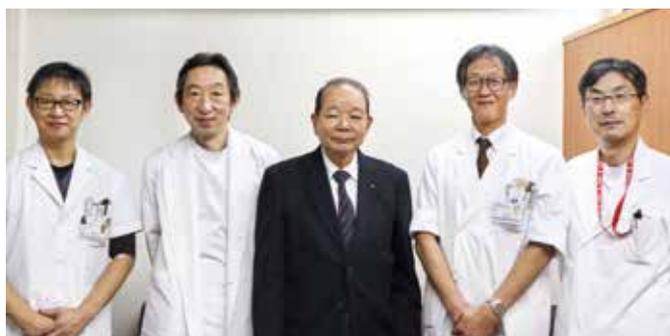
毎週水曜日には外科、消化器内科、病理と手術症例の検討を行い、診断・治療法・病理を振り返り、消化器内科のDrにも自身が診断した疾患を外科目線、また病理目線で見ること、診断の精度を上げられる様にしています。また手術ビデオも一緒に見ることでさらに精度を上げるようにし、日々研鑽を積んでいます。

金曜日は8時から翌週の予定手術のチェックを行い、その後Dr、Ns、薬剤師、リハビリ、栄養科、ソーシャルワーカーと合同でカンファレンスを行い、患者さんの情報を共有することで、治療方針、退院後の計画について検討しています。これにより他職種の見解を取り入れて、入院中、退院後により良い医療が提供できるよう努めています。

「我が国初の職業看護師」

明治維新、慶応4年から明治元年に掛けて、日本国内で起こった大きな内乱、戊辰戦争の時、関東、東北地方に攻め込んだ土佐藩が、傷病兵の看病の為に、女性を雇ったのが、日本最初の職業看護師の誕生だった様だ。戊辰戦争時、栃木県宇都宮市のすぐ南に位置する壬生町で起こった「安塚の戦い」で、土佐藩の負傷兵を看護するのに、人出が足りず、壬生藩の蘭学者の婦女子を雇ったことが、「銃創看病人として、此地の婦人9名を雇い入れ」と土佐藩従軍記に記載があると、壬生歴史資料館の歴史家が述べている。江戸時代の壬生藩は、代々の将軍が、日光東照宮へ参詣する、日光街道の要衝にあり、壬生城には、藩主でさえ使用できない将軍専用の御殿があったらしい。同時に、将軍宿泊時の

護衛の時のリスク管理に、壬生藩の鳥居家は、医学と兵法を重んじたようだ。壬生での解剖の事実を書いた「解剖生図」も残っている。壬生藩の医学が進んでいただけでなく、オランダの医学書を読む蘭学者も多くて、その婦女子が戦いで、戦場に駆り出されたのだらうと言われている。横浜軍人病院へ、英国から来日した看護師より1カ月早かった様だ。だから、我が国の看護師第一号は、その頃の土佐藩、高知が生んだ事になる。太平洋戦争の末期に、高知に医学部が設立直前になって、終戦となり、それが現代の高知県立大学看護科として、東大と共に、国公立で最初の看護大学になった事は良く知られている。どうも、看護の世界では、高知が先鞭をつけている気がしてならない。将来は、医療、看護、介護、福祉に特化して、薬学部や放射線技師の養成など、医療のプロも養成して欲しいなあ。尚、現在の壬生町は、おもちゃの町として有名である。コロナが収まれば、一度訪れて見たいなあと考えている。



向かって左から尾崎信三先生、上地一平先生、細木秀美先生、安藤徹先生、西村哲也先生

社会医療法人仁生会 細木病院

副院長 上地 一平

昨年2月の終わりに当院職員が県内2例目の新型コロナ感染者と判明し、職員が動揺する中、即座に新型コロナ対応チームを立ち上げ、手探り状態でありとあらゆる感染対策を行ってきました。しかしながら12/14に院内クラスターが発生してしまい、記者会見も行われました。保健所と県と綿密な連絡を取りながら、全職員が一致団結して感染拡大を阻止し、今年1/7に何とかクラスター収束宣言をすることができました。2020年は当院にとってまさにwithコロナの年でした。2021年は様々な風評被害を乗り越え、いかに病院を立て直すかが焦点の年になります。また、昨年は日本臨床外科学会高知県支部学術集会の当番幹事でしたが、春も秋も開催することができず、2021年の夏には何とか開催できるのではないかと考えています。

当院の外科は現在、尾崎信三外科部長兼医局長、西村哲也血管外科部長、私の3人体制です。2020年の全麻・腰麻の手術件数は107件で、2019年の89件と比べると増えています。乳腺症例が40件から53件に増えたのが影響しており、甲状腺症例も1件から4件に増えました。外科医の高齢化が進むと技術を要する手術や長時間の手術ができなくなります。当院でも乳がん、甲状腺がん以外の悪性腫瘍の手術症例は必然的に減ってきており、他院で手術をした患者さんで術後入院が長引くような症例をお引き受けすることが増えました。

当院では現在8人の研修医を抱えています。最初から外科志望の研修医は今まで一人もいませんが、若い外科医不足が問題になっている中、何とか外科医になってくれないかともがきながら教えていますが、なかなか外科医にはなってくれません。

私も還暦を過ぎ、外科医としての役割は終焉に近づいてきましたが、10年後に若い外科医が疲弊せず、生き生きと仕事ができる環境作りに微力ながら携わることができればと考えています。

イベント・Happy News

2020年イベントスケジュール

- 2月●沖 豊和先生 学位 取得
- 4月●清水 茂翔先生・田中 智規先生・丸井 輝先生 入局
- 4月●並川 努先生 科学研究費 基盤研究 (C) 採択
- 4月●北川 博之先生 科学研究費 基盤研究 (C) 採択
- 4月●上村 直先生 科学研究費 若手研究 採択
- 4月●花崎 和弘先生 高知医療再生機構 令和2年度専門医養成支援事業 採択
- 4月●前田 広道先生 高知医療再生機構 令和2年指導医資格取得支援事業 採択
- 8月●第38回日本ヒト細胞学会 開催
- 11月●第58回日本人工臓器学会大会 開催
- 12月●岩部 純先生 学位 取得

4月

新入局員

清水茂翔先生、田中智規先生、丸井輝先生が入局しました！

今年は、清水茂翔先生、田中智規先生（近森病院）、丸井輝先生の3人の新進気鋭の新人外科医を教室にお迎えできたこと、まことに素晴らしいことと深謝申し上げます。

是非とも当科および関連施設などで精進を重ねながら、最終的には患者さんから慕われる Academic Surgeon（研究マインドを持った手術が上手な外科医）に成長していくことを期待しています。我々は貴方たちをフルサポートしていきますので頑張ってください。応援しています！

5月

楷風会延期

コロナ感染症の拡大（第1波）に伴い、楷風会が延期になりました。
年報 第14号（令和元年）を発刊しました。

6月

日本外科学会『高知家』外科専門医育成プログラム

日本外科学会『高知家』外科専門医育成プログラムを2020年版に更新しました。
統合外科としてより充実した外科専門医育成プログラムを提供できるように改定いたしました。

2020年8月22、23日、第38回日本ヒト細胞学会を高知で開催しました。

[市民公開講座開催]

「高知が生んだ研究者が語る
細胞について知ろう～人は細胞から出来ている～」

第38回（2020）日本ヒト細胞学会学術集会内で市民公開講座を開催いたしました。

片岡 寛章先生（宮崎大学医学部）四ノ宮 成祥先生（防衛医科大学校 防衛医学研究センター／分子生体制御学講座）並川 努先生（高知大学医学部外科学講座外科1）谷内 恵介先生（高知大学医学部消化器内科）を講師にお招きし、花崎 和弘先生（第38回日本ヒト細胞学会学術集会会長）が座長をお務めになりました。最先端のお話から細胞にまつわる倫理的な側面、歴史など興味深いお話を多くの市民の方にご清聴いただきました。



日時	令和2年8月22日（土）午後4時10分
場所	高知県立県民文化ホール1F グリーンホール（高知市本町4-3-30）
演題	1. 地の縁、人の縁、細胞の縁 2. 生命の不思議とゲノム研究の課題 3. 分子細胞レベルから見た新しいがん診断と治療 4. 新規治療薬の承認を目指した膵癌研究

8月1～28日、研修医2年目の山下柚子先生（2021年度外科専攻医）が肝胆膵チームで研修しました。



研修を終えての感想

指導医の先生方には、外科的手技や術後管理など、様々なことを丁寧に教えていただきました。胆摘では執刀医として貴重な経験もさせていただき、毎日楽しく充実した研修でした。外科で培った経験を活かして残りの研修も頑張ります。

『動画で解説！
外科1ポリクリ実習』
を作成（動画サイズ：62MB）



10月 研修医ローテーション

8月31日～10月2日、研修医2年目の國則誠宏先生が下部消化管チームで研修しました。

研修を終えての感想

器具の持ち方から始まり、ヘルニア手術の執刀をさせていただき、手術の難しさ、面白さを肌で感じることができました。指導くださった先生方、1ヶ月間ありがとうございました。



10月 3人の研修医

2020年10月5～30日、3人の研修医の先生が外科を研修しました。



写真左から 乳腺外科チーム：岡田真侑先生、上部消化管チーム：畠中優先生、下部消化管チーム：安崎恵理先生

非常に熱心に手技の練習に取り組んでいるのが印象的でした。
少しでも外科の魅力が伝われば幸いです。お疲れ様でした。

11月

第58回日本人工臓器学会大会開催

第58回日本人工臓器学会大会を開催しました。

[市民公開講座]

『テクノロジーが医療を変える 高知から世界へ発信する光線医療』

講師に佐藤隆幸先生（高知大学 循環制御学）をお招きし、座長を花崎和弘先生（第58回日本人工臓器学会大会大会長）がお務めになりました。たくさんの市民の皆様にご参加いただきました。光線医療の開発、原理、臨床応用など興味深い内容を分かりやすい平易な言葉でご解説いただきました。



12月

楷風会中止

コロナ感染症の拡大（第2波）に伴い、断腸の思いで楷風会を延期いたしました。

[特別講演]

「高知で求められる これからの心臓血管外科治療」

第27回楷風会総会での御講演を予定しておりました三浦友二郎先生のスライドを、先生の許可を得て掲載させていただきました。

特別講演会

「高知で求められる これからの心臓血管外科治療」

高知大学医学部心臓血管外科学

教授 三浦 友二郎先生

楷風会関係者殿

いつも大変お世話になり、誠にありがとうございます。心から御礼申し上げます。

さて、来る2020年12月6日に予定していた楷風会ですが、本日中止を決定いたしました。コロナ禍の中、最後まで開催を予定し準備を進めて参りましたが、高知県のCOVID-19新規感染者数の急増をうけ、中止に踏み切りました。今回の楷風会は小生が会長として最後の外科1同門会であったため、とても残念です。楷風会の中止に伴う対応として、資料を改めて郵送いたします。また、特別講演の講師の先生方には、ホームページ用に講演内容の資料をご作成いただき公開予定ですので、是非ご高覧下さい。なお、来年度からは統合外科（外科1、心臓血管外科、呼吸器外科、形成外科）の同門会がスタートする予定です。

令和2年12月2日

楷風会 会長 花崎 和弘

第15回楷風会賞 受賞者

第15回 楷風会賞を受賞して

前田 広道

2020年度楷風会賞を賜り大変ありがとうございます。花崎先生のご指導のもと、上村先生とともに活動を継続していたNCDを用いたデータベース研究の一つがacceptに至りました。何度も統計の先生とメールでやり取りをしながら、研究計画の詳細を詰め、解析自体はほぼ一回で終了するという、本来あるべき研究スタイルで進みました。NCDは全国の外科医が日々努力して集まった結果ですので、残りの分野も大切に進めていきたいと思えます。

今年の8月には日本ヒト細胞学会学術集会、11月には日本人工臓器学会大会の運営に参加させていただきました。コロナ感染症のために広域の移動が制限され、集合が難しい時期でした。私も医局員も（おそらく大会長も）不安がなかったわけではございません。しかし、「こういう時期だからこそ安全性に配慮して開催したい。責任は私がとる」という花崎先生のこころざしのもと皆様と準備を進めました。盛会にそして無事に2学会を終えることができたのは医局にとって、貴重な経験になりました。2021年度には日本蛍光ガイド手術研究会第4回学術集会が高知で開催されますが、引き続き皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。



第15回 楷風会賞受賞者選考に当たって

花崎 和弘

該当年度に一番 activity の高い学術的活動を行った楷風会員に贈られる楷風会賞の15回目の受賞者は、前田広道先生（特任講師）を選考させていただきました。2019年に続いての連続受賞で通算3回目の受賞となります。

選考の理由を述べさせていただきます。前田広道先生は対象となる2020年1月より12月までの1年間に、多忙な医局長業務を兼務しながら、臨床・研究・教育を推進し、複数の英語論文を first author および corresponding author として publish and /or in press しました。特筆すべきは、NCD データを用いた研究解析において、前田広道先生がアイデアを出し、日本肝胆膵外科学会から推薦された研究課題であります「消化器外科領域の手術施行日（曜日・季節）と手術成績の関係」が日本消化器外科学会の審査を経て2019年度消化器外科領域新規研究課題に採択された後、精力的に本事業を推進しています。既にNCD データを駆使した複数の英語論文を次々と完成し、国際誌へ投稿しています。かつ本事業に関連する上村直先生の英語論文作成指導も同時に行っており、近い将来上村先生の学位論文取得に向け、積極的にサポートしています。

加えて「巻頭言」にあります様に、本年度当科が主催した第38回日本ヒト細胞学会学術集会（8月22日・23日）および第58回日本人工臓器学会大会（11月12日-14日）は、コロナ禍の大変厳しい中にもかかわらず、現地集合型開催に踏み切りました。前田広道先生はこうした中でも医局長および準備委員長（ヒト細胞学会）、副準備委員長（人工臓器学会）として、一貫して冷静かつ慎重な態度で見事に教室員をまとめ上げ、両学会を成功に導いてくれました。医局長として本年度の教室行事として最も優先順位の高かった2つの全国学会を無事に遂行した能力を高く評価しています。個々人の人柄や能力というのはこうした非常時にこそ、鮮明にわかるということを改めて学ばせていただきました。With コロナ時代に2つの全国学会において発揮された前田広道先生の類まれなる粘り強さと獅子奮迅のご活躍ぶりから判断して、将来の教室を担う重責にも充分耐えうる資質の持ち主ではないかと期待しています。

以上の優れた学術的活動および将来のオーガナイザーとしての資質への期待も込めて、第15回楷風会賞を前田広道先生に授与します。

これからも持ち前の粘り強さと謙虚かつ感謝の気持ちを忘れないお人柄で教室を牽引していただきたく存じます。

第15回 Impact Factor 賞 受賞者

第15回 Impact Factor 賞を受賞して

並川 努

この度は第15回 Impact Factor 賞にご推挙いただきまして誠にありがとうございました。花崎教授ならびに同門の先生方に厚く御礼申し上げます。感激とともに身に余る光栄で大変恐縮しております。

今回、胃癌に関する論文「Evaluation of systemic inflammatory response and nutritional biomarkers as predictive factors in patients with recurrent gastric cancer」を Oncology 誌に掲載していただくことができました。胃癌治療を行う上で治癒切除可能であった場合でも残念ながら再発をきたすことがあり、その際には生存期間延長を目標として薬物治療を行うことになります。毎年新たな薬物が開発され臨床使用できるようになってきており、使用できる薬剤も確実に増えてきていますが、これらの薬剤を有効活用するためには薬物の切り替え時期を適切に判断する必要があります。再発病巣を標的的病変として捉えることができれば大きな指標となり、腫瘍マーカーや症状も加味しつつ臨床判断を行う中で、炎症および栄養学的指標が再発胃癌の有用な予後予測因子となることをこの論文で示しています。今後これらの結果を有効に活用し、一人一人の患者さんの治療経過を深掘して、治療成績の向上に努めて参りたいと思っております。

日常診療の中で疑問に感じたことの解答を探索し、アウトプットすることで従来の診療方法を改めて考え直すきっかけにしていき、科学的データのみならず、医師の専門性や経験、患者さんの意向を尊重して最善の医療、ベストプラクティスを患者さんにお届けできるように日々精進を重ねて参りたいと思います。この度は誠にありがとうございました。



第15回 Impact Factor 賞受賞者選考に当たって

花崎 和弘

該当年度に最も Impact Factor (IF) の高い雑誌に論文掲載が認められた楷風会員に贈られる IF 賞の15回目の受賞者は、並川 努先生（講師・病院教授）となりました。並川先生は2015年から2018年までの4年連続受賞も含めて、IF 賞の常連受賞者のお一人です。誠にありがとうございます。

選考の理由ですが、選考対象となる2020年1月より12月までに掲載または受理された論文の中から、並川先生の論文（Oncology）が2019年 journal citation report より一番高い IF 値を有していたためです。

並川先生は原著・総説・症例報告など毎年5編以上の英語論文を筆頭著者としてコンスタントに publish し続けており、当科を代表する Academic Surgeon です。加えて豊富な研究業績が認められ、四国地区では数少ない日本消化器外科学会の評議員にも選出されています。

並川先生の「自然科学から学ぶ謙虚な姿勢」は教室員のお手本であり、いつも敬意を表しています。今後とも精進を重ねて更なる高みを目指してください。益々のご活躍とご発展を祈念申し上げます。

学外研修報告

兵庫県立こども病院

小児外科 藤枝 悠希

2020年は様々な影響で手術件数が減少しましたが、こども病院での研修2年間で一通りの小児外科疾患に触れることができました。小児外科専門医試験も合格し論文も accept され、充実した国内留学でした。快く送り出して下さった先生方に厚く御礼申し上げます。4月から高知に戻りますので再度ご指導ご鞭撻の程よろしくお願い致します。



社会医療法人近森会 近森病院

消化器外科 津田 晋

2016年に高知大学外科1に入局し、2017年から近森病院消化器外科で働いています。

2017年4月～2020年12月の間に1063件の手術を経験させていただき（執刀749件）、2019年からは他の先生方の指導の下、外来での化学療法も担当させていただいています。

2018年度は人手不足で体力的・精神的に非常に厳しい時期でしたが、2019年に小松優香先生、2020年に田中智規先生が近森病院へ来て下さり、現在は楽しく診療に従事できています。

研修医の先生方に外科の魅力を伝えることにも力を入れており、2021年にも近森病院研修医から1名高知大学外科1に入局していただけることになりました。

今後もからだに気をつけてがんばっていきたいと思います。

社会医療法人近森会 近森病院

小松 優香

近森病院で後期研修を開始し約2年、熱い先生方のご指導の下で多種多様な症例を経験させていただきました。胆嚢炎や虫垂炎は主に執刀させて頂き、昨年の春からすると少しは上達したかと思えます。4月からは大学で勉強させていただきます。更なるレベルアップを目指して頑張りますので、ご指導ご鞭撻の程よろしくお願い致します。

高知県立幡多けんみん病院

川西 泰広

2017年4月より幡多けんみん病院で研修を開始し、今年度で4年目になります。今年は若手の長という立ち位置で、多くの症例を経験させていただきました。後輩の先生と行う手術も多くなり、日々勉強が必要と感じています。個々の症例を大切に、修練を続けていきます。今後ご指導をお願いいたします。

高知県立幡多けんみん病院

石田 信子

卒後5年目で、現在幡多けんみん病院で研修中の石田信子と申します。

幡多に来て2年目になりますが、胆嚢摘出術など多数の手術を執刀させていただいています。また、外傷や癌の終末期など、大学ではあまり経験できない症例も受け持たせていただき、忙しいながらも充実した研修生活を送っています。

高知県立幡多けんみん病院

宇都宮 正人

高知赤十字病院に2年間勤務したのち、2020年度から幡多けんみん病院で勤務させていただいています。幡多地域の方は温かみがあって人情あふれる方が多いように思います。私は小学生まで中村市で過ごしていましたが、再び幡多地域の方と接するなかで、こちらの雰囲気懐かしく感じています。幡多の方の笑顔を大切にできるよう、という意識をもって診療に臨んでいければと思っています。

学外近況報告

高知学園大学

健康科学部 管理栄養学科 松浦 喜美夫

教授就任に関する近況報告について

平成15年に高知医科大学を退職し、いの町の国保仁淀病院の院長として勤務し、地域医療に携わって参りましたが、令和2年3月31日をもちまして退職させて頂きました。17年間の長きにわたり、仁淀病院の改築などもでき、無事に大禍なく、院長職を務めさせていただくことができました。この間、荒木教授、花崎教授、楷風会の諸先生をはじめ、第一外科の医局の皆様には、多くのご支援をいただき大変有り難うございました。心から感謝申し上げます。

退職後は、令和2年4月に開学いたしました高知学園大学健康科学部管理栄養学科の教授として就任し、医療人の教育に携わっています。

高知学園大学は、学校法人高知学園が、今まで高知学園短期大学で担ってきた、栄養士及び検査技師の養成を発展的に受け継ぎ、食を通じた健康の増進と高度な専門性を持った職業人を養成することを目指し、健康科学部管理栄養学科と臨床検査学科の4年制大学として誕生しました。私と高知学園との縁は15年程前からで、非常勤講師として高知学園短期大学などで医学概論等の講義をさせていただいていました。また一方、高知NST (Nutrition Support Team) 研究会の立ち上げや、TNT (Total Nutrition Therapy) 研修会の講師や、NST 専門療法士の育成や、栄養士会などでの講演などと、臨床栄養療法の普及や、医師や管理栄養士、看護師など、栄養療法に関わる専門職の教育などにも携わってきました。そのような経過から、新設の高知学園大学で専門職の教育に携わる運びとなりました。

大学での近況ですが、昨年来の新型コロナウイルス感染症の蔓延の影響で、外部に対する大学の開学式、入学式などは執り行われず、寂しい船出となりました。また授業も感染対策から、変則的な形式でしか行えていません。医療の専門職を育てることとなり、栄養士や検査技師、看護師などの国家試験問題を見ると、医学の進歩著しく、膨大な量の知識や技術を習得する必要がある、どの職種も大変だなと感じます。小生も寄る年波には勝てず、新しい知識等の習得は大変で、新しいことを覚えられず苦慮しておりますが、自分自身も新しい知識に接することができ、大いに勉強にもなっております。

新しい職場で、これからの医療人に求められる、地域人々の健康増進や地域医療に貢献できる人材の育成に精進したいと思っています。今後とも皆様のご支援を賜りますよう、よろしくお願い致します。

高知赤十字病院

第二外科副部長 甫喜本 憲弘

平素より花崎教授をはじめ外科学講座外科1の先生方、関連病院の先生方には大変お世話になっております。

2012年4月より高知赤十字病院外科に赴任して以来、9年が経過しました。

日常診療は主に乳腺甲状腺疾患を担当しておりますが、当院は救急に力を入れているという特性上、救急で来る消化器疾患（虫垂炎・胆嚢炎・腹膜炎など）も外科1でご指導いただいた経験をもとに携わっています。

乳腺甲状腺の診療は、自分と徳島大学 胸部・内分泌・腫瘍外科より赴任されている行重佐和香先生（卒後7年目）の2人でやっており、外来・病棟業務と手術を頑張っています。

行重先生は非常に優秀で、現在乳腺甲状腺のほとんどの手術を執刀医としてこなしており、また救急の消化器疾患にも対応しながら頑張っています。しかし、来年は移動になる可能性が高いので、行重先生の代わりとなる人材として高知大学からの応援を期待しております。

乳腺・甲状腺手術件数

1. 乳腺	令和元年度	平成30年度
乳癌	43件	23件
乳房温存術	10件	6件
乳房切除術	33件	17件
温存率	23%	26%
良性疾患	6件	2件
腋窩郭清	0件	0件
乳房再建	7件	2件
2. 甲状腺		
甲状腺癌	5件	9件
全摘術	2件	0件
葉切除術	3件	9件
良性疾患	8件	9件
副甲状腺疾患	0件	2件

大学ほど乳腺甲状腺領域の手術件数はありませんが、手術件数や紹介患者数は順調に増えています。これも大学病院ならびに地域の医療機関の皆様のご協力の賜物と感謝しております。それに応えられるよう日々努力し、精進してまいりますので、よろしく願いいたします。

2021年1月より、岩部 純先生に赴任していただきました。大学病院の専門性に特化したグループ別診療と違って、救急病院ならではの上部・下部ともに担当したものすべてを診るというのは、最初は不慣れだと思いますが、研鑽を積んでいただき、消化器疾患を担当する中堅 Dr. として、今後のさらなる活躍を期待しております。

今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

平素より花崎教授をはじめ外科学講座外科1教室の先生方には大変お世話になり、この場をお借りし心より御礼申し上げます。また、手術が必要な症例に関しても、いつも迅速に対応して下さり重ねて感謝申し上げます。

楷風は今回が最終号となることととても寂しく思うと同時に、この15年間時代が様々に移り変わる中、大変なご苦労があったとは存じますが、教室のこのような御発展のよし大慶に存じます。

さて、2020年度は COVID-19 で始まり、COVID-19 ばかりの一年間でした。新型インフルエンザの時のようにすぐに落ち着いて欲しいという希望は打ち砕かれ、特に透析患者の致死率は 40 歳代でも 5.6% と高く、80 歳以上では 46.6%、全年齢の合計でも 28.9% と恐ろしい数値になっています(2021 年 1 月 15 日現在)。透析治療は大人数の集団で同時に行う治療であり、より厳格な感染対策が求められます。

当院でも院内感染を防ぐために様々な取り組みを行っています。一般的な感染対策に加え、病院入口にサーモグラフィカメラの設置、患者に発熱・感冒症状がある場合は積極的な検査と、個室隔離を行ってきました。始めは院内の感染外来専用の診察室を使用していましたが、動線を考え、院外に感染外来用のプレハブを建てることにしました。完成までには時間がかかるため、その間は昔使っていたプレハブを再利用していました。新しいプレハブも完成し使用開始に向けて準備しています。

また、職員へは、発熱・感冒症状がある場合の出勤停止、積極的な検査、会食禁止、県外への渡航禁止、昼食時の沈黙、共有物品使用前後の消毒などなど、、事細かに決めているので、殺伐とした職場のようになり、皆の疲労の色が濃くなってきています。

この 1 年間の経験で、患者・職員に関わらず、自分でも感染していることに気がついていない感染者がいた時に、他者に感染させない対策を普段から行うことが最も重要と感じました。

御迷惑をおかけしたことも多々あり心苦しく感じておりますが、今後とも御指導・御鞭撻頂ければ幸いです。末筆となりましたが、外科 1 教室の益々の御発展と先生方の御活躍をお祈り申し上げます。

久留米大学

外科学講座小児外科部門 助教 橋詰 直樹

現在、久留米大学外科学講座小児外科部門に勤務しております。

2019 年は講座で第 56 回日本小児外科学会学術集会を開催し、事務局を担当しました。無事に学術集会を終えたことは非常に勉強になる経験でした。学術集会の仕事が落ち着いた 7 月より、山形県鶴岡市立荘内病院にて外科・小児外科にて半年間勤務させていただきました。初めての東北での勤務でしたが、異なった文化に触れながら多くの症例を経験することができました。また、第 81 回日本臨床外科学会総会で座長を仰せつかりました。花崎教授をはじめ事務局の方々には大役をいただき、大変感謝申し上げます。

2020 年 1 月より久留米大学に戻りましたが、本年は小児外科もコロナ禍にて手術も 8 割ほどに減っておりまして。現在も PCR をうまく使いながら手術を行なっているような状況です。

本年度でお世話になった八木実教授が御退官され、私もより執刀症例を経験したい希望があり、縁あって次年度から国立成育医療研究センターで勤務する事となりました。今まで以上に複雑な症例に携わる機会も増えると予想され、身が引き締まる思いです。

高知大学は外科・小児外科の育成も優れ、後輩が多くの経験をされていることを学会で拝聴し嬉しく思います。あまり轍も作れず後輩のお手本になれなかった自分が恥ずかしくも思いますが、今後のますますの発展を祈念しております。

学生指導

私たちは学生指導、特に臨床実習の指導に力を入れています。今年は残念ながら COVID-19 の拡大に伴い十分な臨床実習経験を提供できない面がありました。それを補うためにレポート作成の補助、ミニレクチャーの拡大実施、縫合実習・ドライラボ実習などの実施に力を入れました。レポート作成ではオリエンテーションを山口先生に、細部にわたるレポートの作成指導は各グループの先生方にいただきました。また、実習縫合・ドライラボ実習では1月より辻井先生に専属で指導にあたっていただきました。

忙しい中、丁寧なご指導をいただいた各先生方と、オリエンテーションのレクチャー、全体調整、レポート評価をいただきました、藤澤先生、宗景先生、花崎先生に改めて感謝を申し上げます。

今後の目標として、来年度は縫合実習の達成度を評価して、学生にとって刺激があり、更に充実したものになるよう仕組みを作っていきたいと思っています。また、関連病院の先生方に、講義やミニレクチャーなど学生教育に携わっていただくことで、高知県全体で外科医を育成できる仕組みができればと願っています。是非、大学内外からのご意見や案などを賜ることができればと存じます。今後ともご指導を賜りますようお願い申し上げます。

(前田広道)



レポート発表風景 中央は評価者の宗景匡哉Dr (学生の許可を得て撮影・掲載)

事務だより

2020年も皆様大変お世話になりありがとうございました。外科1事務は川村（麻）、梶原さん、冨本さんで担当しました。乳腺センターは辻岡さんが引き続きご担当くださいました。そして、NCDの登録は川村（香）さんが担当してくれました。それぞれの担当の持ち場を順調にこなすことができたかと安堵しています。

2020年はコロナ感染症の拡大との戦いでした。コロナ禍により、昨日まで当然に出来ていたことが突如出来なくなり、行動全てに制限がかかりました。目に見えないものへの怖さや、先の見えない状況の中、連日流れる報道は閉塞感を感じました。コロナにより、普段当たり前で気づけない人と人との関わり合うことの大切さや、本当に必要なものと不要なものを改めて考えさせられました。今後はウイルスと人との共存していく時代と言われております。環境問題としてまず自分にできることを率先していきたいと思えます。

業務については、緊急事態宣言下ではリモートワークに変更し対応しました。大学事務・病院からも多くのコロナ関連の書類や通知があり、それらの処理は大変でした。病院で勤務されているDrは直接、患者さんの診察に関わりますので、より大変であったと思えます。

そのような中ではありましたが、8月には第38回日本ヒト細胞学会学術集会、11月には第58回日本人工臓器学会大会を万全なコロナ対策のもと現地開催し、無事盛会のうちに終わることができました。運営側としてサポートさせていただきましたことを、とても誇りに思えます。理事長職も兼務される中、花崎先生の現地開催のご判断は、私たちには計り知れない相当な覚悟だったかと思えます。本当にお疲れ様でした。

2021年は花崎先生にとって、外科1でのお仕事としては総まとめの年となります。事務一同団結して花崎先生や医局の先生方のお仕事が円滑に進むよう忠勤を尽くしたいと思いますので、引き続きよろしくお願いいたします。

(川村麻由)



手術件数

● 手術件数調査票（2020年1月～12月）

高 知 大 学		
手 術		
		鏡視下手術
甲 状 腺	32	
乳 腺	155	
肺、縦 隔	1	
食 道	24	21
胃、十二指腸	69	35
肝 臓	44	4
胆 道	59	48
膵 臓	25	1
脾 臓	2	1
虫 垂	8	7
ヘルニア	44	22
イレウス	30	13
小 腸	10	2
大 腸	117	99
肛 門	3	1
小 児	91	40
そ の 他	127	2
合 計	841	296

※医局全体の症例を集計

● 手術件数調査票 (2020年1月～12月)

病院名	頸部	胸部				腹部										他		合計
	甲状腺	乳腺	肺・縦隔	食道	胃・十二指腸	肝臓	胆道	膵臓	脾臓	虫垂	ヘルニア	イレウス	小腸	大腸	肛門	小児	その他	
あき総合病院	1	9			4		19			18	49	5	1	28	1		27	162
愛宕病院			3	3	12	1	31		3	9	18	7	8	34	5		64	198
いずみの病院	1	7			5		9			1	10		1	4			6	44
渭南病院					5		7				10			9	1		257	289
くぼかわ病院					1		4				11			10	1		112	139
くろしお病院					4		6			5	6			3			24	48
高知生協病院	2	29			3		10				12	1		11	10		28	106
島津病院											1						215	216
竹下病院					1						2	1		3	4		4	15
田野病院															4		16	20
近森病院	3	6	38	1	64	25	115	16	2	61	79	15	43	112	54		19	653
仁淀病院		2			2		1				12		1	6	5		46	75
幡多けんみん病院		40	7	5	44	14	109	4	1	43	59	21	8	88	2		64	509
細木病院	4	53					6			6	21	3		7	6	1		127

業績：論文発表（2020.1～2020.12）

[英語論文]

論文

著者名	論文タイトル	雑誌名
1 Anayama T, Sato T, Hirohashi K, Miyazaki R, Yamamoto M, Okada H, Orihashi K, Inoue K, Kobayashi M, Yoshida M, Hanazaki K	Near-infrared fluorescent solid material for visualizing indwelling devices implanted for medical use	Surg Endosc 2020; 34: 4206-4213
2 Fujieda Y, Maeda H, Oba K, Okamoto K, Fukudome I, Shiga M, Kawanishi Y, Akimori T, Kuroiwa H, Nishimoto H, Namikawa T, Murakami I, Kobayashi M, Hanazaki K	Lymph Node Retrieval After Colorectal Cancer Surgery: A Comparative Study of the Efficacy Between the Conventional Manual Method and a New Fat Dissolution Method	Surg Today 2020; 50: 726-733
3 Fukudome I, Maeda H, Okamoto K, Kuroiwa h, Yamaguchi S, Fujisawa K, Shiga M, Dabanaka K, Kobayashi M, Namikawa T, Hanazaki K	The safety of early versus late ileostomy reversal after low anterior rectal resection: a retrospective study in 47 patients	Patient Saf Surg 2020 (accepted)
4 Hanazaki K	Conference Report: Communication on the 58th Annual Meeting of the Japanese Society for Artificial Organs in 2020	Artif Organs 2020 (accepted)
5 Hayashi H, Tajima H, Hanazaki K, Takamura H, Gabata R, Okazaki M, Ohbatake Y, Nakanuma S, Makino I, Miyashita T, Ninomiya I, Fushida S, Yoshimura K, Ohta T	Safety of Artificial Pancreas in Hepato-Biliary-Pancreatic Surgery: A Prospective Study	Asian J Surg 2020; 43: 201-206
6 Iwabu J, Namikawa T, Yokota K, Kitagawa H, Kihara K, Hirose N, Hanazaki K	Successful Management of Aorto-esophageal Fistula Caused by Esophageal Cancer Using Thoracic Endovascular Aortic Repair	Clin J Gastroenterol 2020; 13: 678-682

著者名	論文タイトル	雑誌名
7 Kawase K, Nomura K, Nomura S, Akashi-Tanaka S, Ogawa T, Shibasaki I, Shimada M, Taguchi T, Takeshita E, Tomizawa Y, Hanazaki K, Hanashi T, Yamauchi H, Yamashita H, Nakamura S	How pregnancy and childbirth affect the working conditions and careers of women surgeons in Japan: findings of a nationwide survey conducted by the Japan Surgical Society.	Surg Today 2020 (Online ahead of print)
8 Kitagawa H, Namikawa T, Iwabu J, Yokota K, Uemura S, Munekage M, Hanazaki K	Correlation between indocyanine green visualization time in the gastric tube and postoperative endoscopic assessment of the anastomosis after esophageal surgery.	Surg Today 2020; 50: 1375-1382
9 Kumon M, Kumon T, Tsutsui E, Ebashi C, Namikawa T, Ito K, Sakamoto Y	Definition of the caudate lobe of the liver based on portal segmentation.	Glob Health Med. 2020; 2: 328-336
10 Maeda H, Endo H, Ichihara N, Miyata H, Hasegawa H, Kamiya K, Kakeji Y, Yoshida K, Seto Y, Yamaue H, Yamamoto M, Kitagawa Y, Uemura S, Hanazaki K	Association of Day of the Week with Mortality After Elective Right Hemicolectomy for Colon Cancer: Case Analysis from the National Clinical Database	Ann Gastroenterol Surg 2020 (accepted)
11 Maeda H, Okada KI, Fujii T, Oba MS, Kawai M, Hirono S, Koderu Y, Sho M, Akahori T, Shimizu Y, Ambo Y, Kondo N, Murakami Y, Ohuchida J, Eguchi H, Nagano H, Sakamoto J, Yamaue H	No Significant Effect of Daikenchuto (TJ-100) on Peritoneal IL-9 and IFN- γ Levels After Pancreaticoduodenectomy	Clin Exp Gastroenterol 2020; 19: 461-466
12 Nakayama T, Nozawa N, Kawada C, Yamamoto S, Ishii T, Ishizuka M, Namikawa T, Ogura SI, Hanazaki K, Inoue K, Karashima T	Mitomycin C-induced cell cycle arrest enhances 5-aminolevulinic acid-based photodynamic therapy for bladder cancer	Photodiagnosis Photodyn Ther 2020; 31: 101893
13 Namikawa T, Hashiba M, Kitagawa H, Mizuta H, Uchida K, Sato T, Kobayashi M, Hanazaki K	Innovative marking method using novel endoscopic clip equipped with fluorescent resin to locate gastric cancer	Asian J Endosc Surg 2020 (Online ahead of print)

著者名	論文タイトル	雑誌名
14 Namikawa T, Iwabu J, Hashiba M, Munekage M, Uemura S, Yamada T, Kitagawa H, Mizuta H, Okamoto K, Uchida K, Sato T, Kobayashi M, Hanazaki K	Novel Endoscopic Marking Clip Equipped With Resin-Conjugated Fluorescent Indocyanine Green During Laparoscopic Surgery for Gastrointestinal Cancer	Langenbecks Arch Surg 2020; 405: 503-508
15 Namikawa T, Iwabu J, Munekage M, Uemura S, Maeda H, Kitagawa H, Nakayama T, Fukuhara H, Inoue K, Al-Sheikh M, Jaiswal N, Kobayashi M, Hanazaki K	Laparoscopic-endoscopic Cooperative Surgery for Early Gastric Cancer With Gastroesophageal Varices	Asian J Endosc Surg 2020; 13: 539-543
16 Namikawa T, Iwabu J, Munekage M, Uemura S, Maeda H, Kitagawa H, Nakayama T, Inoue K, Sato T, Kobayashi M, Hanazaki K	Evolution of photodynamic medicine based on fluorescence image-guided diagnosis using indocyanine green and 5-aminolevulinic acid.	Surg Today 2020; 50: 821-831
17 Namikawa T, Maeda M, Yokota K, Tanioka N, Fukudome I, Iwabu J, Munekage M, Uemura S, Maeda H, Kitagawa H, Kobayashi M, Hanazaki K	Assessment of Systemic Inflammatory Response and Nutritional Markers in Patients With Trastuzumab-treated Unresectable Advanced Gastric Cancer.	In Vivo 2020; 34: 2851-2857
18 Namikawa T, Yokota K, Iwabu J, Munekage M, Uemura S, Tsujii S, Maeda H, Kitagawa H, Karashima T, Kumon M, Inoue K, Kobayashi M, Hanazaki K	Incidence and risk factors of osteoporotic status in outpatients who underwent gastrectomy for gastric cancer	JGH open 2020; 4: 903-908
19 Namikawa T, Yokota K, Tanioka N, Fukudome I, Iwabu J, Munekage M, Uemura S, Maeda H, Kitagawa H, Kobayashi M, Hanazaki K	Systemic inflammatory response and nutritional biomarkers as predictors of nivolumab efficacy for gastric cancer.	Surg Today 2020; 50: 1486-1495
20 Namikawa T, Yokota K, Yamaguchi S, Iwabu J, Munekage M, Uemura S, Tsujii S, Maeda H, Kitagawa H, Kumon M, Kobayashi M, Hanazaki K	Evaluation of Systemic Inflammatory Response and Nutritional Biomarkers as Predictive Factors in Patients With Recurrent Gastric Cancer	Oncology 2020; 98: 452-459

著者名	論文タイトル	雑誌名
21 Ogawa M, Namikawa T, Oki T, Munekage M, Maeda H, Kitagawa H, Dabanaka K, Sugimoto T, Kobayashi M, Sakata O, Matsuda K, Hanazaki K	Evaluation of Perioperative Intestinal Motility Using a Newly Developed Real-Time Monitoring System During Surgery.	World J Surg 2020 (Online ahead of print)
22 Ohbuchi K, Kitagawa H, Sato M, Suzuki H, Kushida H, Nishi A, Yamamoto M, Hanazaki K, Arita M, Ohbuchi K	Differential annotation of converted metabolites (DAC-Met): Exploration of Maoto (Ma-huang-tang)-derived metabolites in plasma using high-resolution mass spectrometry	Metabolomics 2020; 16: 63
23 Tanioka N, Maeda H, Tsuda S, Iwabu J, Namikawa T, Iguchi M, Hanazaki K	A case of spontaneous mesenteric hematoma with diagnostic difficulty	Surg Case Rep 2020; 6: 124
24 Uemura S, Namikawa T, Fujisawa K, Hanazaki K	A case of advanced hepatocellular carcinoma with gallbladder invasion	Jpn J Clin Oncol 2020; 50: 623-625
25 Yamaguchi S, Maeda H, Fujisawa K, Fukudome I, Okamoto K, TUsui T, Hanazaki K	A case of colon adenocarcinoma with neuroendocrine differentiation	Ann Cancer Res Ther 2020; 28: 32-34
26 Yamamoto M, Isomura T, Orihashi K, Miyashita K, Kitaoka H, Hanazaki K, Yamasaki N	Myocardial infarction-related left ventricular rupture with the tear across the ventricular wall detected on echocardiography	Gen Thorac Cardiovasc Surg 2020; 68: 67-69
27 Yamamoto M, Ninomiya H, Miyashita K, Tashiro M, Orihashi K, Inoue K, Sato T, Hanazaki K	Influence of residual coronary flow on bypass graft flow for graft assessment using near-infrared fluorescence angiography	Surg Today 2020; 50: 76-83
28 Yokota K, Namikawa T, Maeda M, Tanioka N, Iwabu J, Uemura S, Munekage M, Maeda H, Kitagawa H, Kobayashi M, Hanazaki K	Synchronous duodenal mucosa-associated lymphoid tissue lymphoma and gastric cancer	Clin J Gastroentero 2020 (Online ahead of print)

[日本語論文]

論文

著者名	論文タイトル	雑誌名
1 花崎和弘	地域から世界へ発信する臨床外科学 Staying Local, Moving Global	日本臨床外科学会雑誌 2020; 81: 613-622
2 福留惟行、駄場中研、上村直、 岡本健、小林道也、花崎和弘	術中大量出血に対し短時間ガーゼ パッキングを行い巨大腫瘍を摘出 した一例	臨床外科 2020; 75: 995-999
3 福留惟行、岡本健、山口祥、 藤澤和音、小林道也、花崎和弘	Symbotex™ Composite Mesh に工夫を加えた腹腔鏡下 Sugarbaker 法	日本内視鏡外科学会雑誌 2020; 25: 360-365
4 谷岡信寿、上村直、山口祥、 宗景匡哉、北川博之、花崎和弘	食道切除胃管再建術後、右胃 大網動脈の切除再建を伴う臍頭 十二指腸切除術を施行した1例	手術 2020; 74: 1519-1525
5 大畠雅之、藤枝悠希	術野消毒の有効性	小児外科 2020; 52: 24-27
6 宗景匡哉、白井隆、花崎和弘	血糖の自動制御システム	ICUとCCU 2020; 44: 139-144
7 杉本健樹	遺伝性乳がんハイリスクグループ に対する検診～現状と課題～ 乳癌易しい罹患性遺伝性腫瘍診 療の基本－遺伝性乳癌卵巣癌症 候群 (HBOC) を中心に	日本乳癌検診学誌 2020; 29: 1-7
8 福留惟行、駄場中研、中村衣世、 山口祥、藤澤和音、花崎和弘	新しい腹部開放創用 「ABTHRERA (TM) ドレッシング キット」の使用経験	臨床外科 accepted (2020)

書籍

著者名	論文タイトル	雑誌名
1 大畠雅之	腹部／大腸 慢性便秘(盲腸瘻、 S状結腸瘻)	スタンダード小児内視鏡外科手術 2020; 223-224
2 上村直、並川努、花崎和弘	術中蛍光イメージングの基本 [導入編] ⑤蛍光イメージングを 手術室に導入するには	術中蛍光イメージング実践ガイド 2020; 32-36
3 並川努、花崎和弘	5-ALA蛍光イメージングの撮影 装置	術中蛍光イメージング実践ガイド 2020; 25-31

業績：学会発表（2020.1～2020.12）

2020（国内）

著者名	演題タイトル	学会名
1 花崎和弘	地方大学から世界に発信する漢方薬の ADME 研究 ～薬物動態からみる ERAS と漢方～	ちば消化器外科KAMPOセミナー 2020. 01 地域連携講演会
2 小河真帆、前田将宏、津田祥、横田啓一郎、福留惟行、岩部純、沖豊和、上村直、宗景匡哉、前田広道、北川博之、駄場中研、岡本健、杉本健樹、小林道也、花崎和弘	手術時連続腸音計測解析による腸蠕動運動モニタリング	第16回日本消化管学会学術集会 2020. 02
3 北川博之、岩部純、横田啓一郎、前田将宏、並川努、花崎和弘	胸腔鏡下食道切除術におけるエンドクローズを用いた奇静脈弓切離端の吊り上げ	第22回Needlescopic Surgery Meeting 2020. 02
4 並川努、前田将宏、横田啓一郎、谷岡信寿、福留惟行、岩部純、宗景匡哉、上村直、前田広道、辻井茂宏、北川博之、岡本健、小林道也、花崎和弘	皮膚筋炎合併胃癌の再発により嚥下機能障害が増悪し栄養管理に難渋した1例	第35回日本臨床栄養代謝学会学術集会 2020. 02
5 横田啓一郎、北川博之、並川努、花崎和弘	Needlescopic surgeryと若手教育～若手外科医が思うこと～	第22回Needlescopic Surgery Meeting 2020. 02 特別企画
6 藤澤和音、山口祥、前田広道、岡本健、駄場中研、花崎和弘	一時的回腸ストーマの90日以内閉鎖の実臨床における安全性の検討	第75回日本消化器外科学会 2020. 07
7 並川努、前田将宏、横田啓一郎、岩部純、宗景匡哉、上村直、辻井茂宏、前田広道、北川博之、小林道也、花崎和弘	二重エネルギー X線吸収測定法を用いた胃切除術後患者の骨塩量評価	第92回日本胃癌学会総会 2020. 07
8 並川努、前田将宏、横田啓一郎、谷岡信寿、津田祥、藤澤和音、福留惟行、岩部純、宗景匡哉、上村直、前田広道、北川博之、岡本健、羽柴基、山田高義、水田洋、耕崎拓大、内田一茂、小林道也、花崎和弘	集学的治療が奏功した胃癌併存巨大胃 GIST の1例	第106回日本消化器病学会総会 2020. 08
9 宗景絵里、世良田聡、辻井茂宏、藤本讓、仲哲治、花崎和弘	食道癌 cancer stem-like cells / CSCs に対するサイトカインシグナル阻害分子 (SOCS-1) 遺伝子治療の有効性の検討	第120回日本外科学会定期学術集会 2020. 08

著者名	演題タイトル	学会名
10 宗景匡哉、北川博之、前田将宏、山口祥、谷岡信寿、藤澤和音、宗景絵里、上村直、前田広道、並川努、花崎和弘	膵全摘における人工膵臓を用いた血糖管理の安定性	第120回日本外科学会定期学術集会 2020. 08
11 前田広道、岡本健、福留惟行、津田祥、藤澤和音、横田啓一郎、志賀舞、並川努、小林道也、花崎和弘	大腸癌術後リンパ節検索個数が12個未満になる因子の抽出と対応	第120回日本外科学会定期学術集会 2020. 08
12 藤澤和音、前田広道、山口祥、福留惟行、岡本健、花崎和弘	高齢者に対する大腸手術の治療成績	第120回日本外科学会定期学術集会 2020. 08
13 福留惟行、前田広道、津田祥、藤澤和音、岡本健、花崎和弘	低位前方切除に伴う一時的人工肛門の早期閉鎖における縫合不全の評価方法	第120回日本外科学会定期学術集会 2020. 08
14 並川努、小河真帆、前田将宏、津田祥、横田啓一郎、藤澤和音、福留惟行、岩部純、沖豊和、上村直、宗景匡哉、前田広道、北川博之、駄場中研、岡本健、杉本健樹、小林道也、花崎和弘	連続腸音計測解析装置を用いた手術が腸蠕動に与える影響の検討	第120回日本外科学会定期学術集会 2020. 08
15 北川博之、岩部純、横田啓一郎、並川努、小林道也、花崎和弘	胸腔鏡下食道切除術における縦隔鏡下左上縦隔郭清	第120回日本外科学会定期学術集会 2020. 08
16 谷岡信寿、上村直、清水茂翔、丸井輝、前田将宏、山口祥、横田啓一郎、藤澤和音、福留惟行、岩部純、宗景匡哉、前田広道、北川博之、並川努、花崎和弘	系統的肝切除術における術中 ICG 蛍光法の有用性	第38回日本ヒト細胞学会学術集会 2020. 08
17 横田啓一郎、世良田聡、辻井茂宏、藤本穰、並川努、村上一郎、花崎和弘、仲哲治	Glypican-1 を標的とした抗体薬物複合体 (ADC) を用いた胆管癌の新規治療開発	第38回日本ヒト細胞学会学術集会 2020. 08 シンポジウム
18 杉本健樹	がん細胞の遺伝子プロフィールによる個別化治療ーホルモン受容体陽性 HER 2陰性乳癌を中心にー	第38回日本ヒト細胞学会学術集会 2020. 08 ランチョンセミナー
19 中山沢、大塚慎平、花崎和弘、井上啓史、中島元夫、田中徹、小倉俊一郎	休眠がん細胞における 5-ALA-PDT の評価	第38回日本ヒト細胞学会学術集会 2020. 08 シンポジウム
20 並川努	分子細胞レベルから見た新しいがん診断と治療	第38回日本ヒト細胞学会学術集会 2020. 08 市民公開講座
21 並川努	進行・再発胃癌に対する治療戦略	第38回日本ヒト細胞学会学術集会 2020. 08 ランチョンセミナー

著者名	演題タイトル	学会名
22 藤枝悠希、大島雅之、前田貢作	卒後7年目が考える小児外科研修	第57回日本小児外科学術集会 2020. 09 特別講演
23 大島雅之、藤枝悠希、花崎和弘、 星野絵理	AIテクノロジーを応用した便色判定 アプリケーションによる胆道閉鎖症 早期発見の試み	第57回日本小児外科学術集会 2020. 09
24 岡田衣世、前田将宏、横田啓一郎、 谷岡信寿、藤澤和音、小河真帆、 岩部純、宗景匡哉、沖豊和、 上村直、前田広道、北川博之、 羽柴基、山田高義、水田洋、 内田一茂、小林道也、花崎和弘	孤立性胃転移をきたした潜在性乳 癌の1	第99回日本消化器内視鏡学会総会 2020. 09
25 花崎和弘	地域医療の未来：外科医ができる こと	「日本外科学会120年記念誌」 座談会 2020. 10
26 杉本健樹、中村衣世、小河真帆、 駄場中研、花崎和弘	当科における dose-dense AC 療 法の安全性と治療効果の検討	第17回日本乳癌学会中国四国地 方会 2020. 10
27 杉本健樹、中村衣世、小河真帆、 駄場中研、花崎和弘	当科における乳癌脳転移症例の 背景と治療効果についての検討	第28回日本乳癌学会学術総会 2020. 10
28 宗景匡哉、北川博之、前田将宏、 谷岡信寿、宗景絵里、上村直、 前田広道、大島雅之、杉本健樹、 並川努、花崎和弘	肝切除術後アセトアミノフェン定期 投与を併用した疼痛簡易の影響 管理に及ぼす影響	第35回日本臨床栄養代謝学会 2020. 10
29 中山沢、山本新九郎、花崎和弘、 井上啓史、中島元夫、田中徹、 小倉俊一郎	Novel strategy to treat dormant cancer cells by photodynamic therapy	第41回日本レーザー医学会総会 2020. 10
30 中山沢、山本新九郎、花崎和弘、 井上啓史、中島元夫、田中徹、 小倉俊一郎	休眠がん細胞における5-ALA- PDT の評価	第41回日本レーザー医学会総会 2020. 10 シンポジウム
31 中山沢、山本新九郎、小倉俊一郎、 花崎和弘、井上啓史	光の性質と医療に用いられる光	第41回日本レーザー医学会総会 2020. 10 シンポジウム
32 並川努、前田将宏、谷岡信寿、 津田祥、藤澤和音、福留惟行、 岩部純、宗景匡哉、上村直、 辻井茂宏、前田広道、北川博之、 福原秀雄、岡本健、井上啓史、 小林道也、佐藤隆幸、花崎和弘	蛍光イメージングを活用した光線 医療技術の実践	第41回日本レーザー医学会総会 2020. 10 シンポジウム
33 花崎和弘	人工臓臓を用いた周術期血糖管理	第56回日本腹部救急医学会総会 2020. 10 学術共催セミナー

著者名	演題タイトル	学会名
34 宗景匡哉、北川博之、藤澤和音、宗景絵里、福留惟行、上村直、前田広道、並川努、花崎和弘	成人特発性小腸重積症に対して腹腔鏡下整復術を施行した1例	第56回日本腹部救急医学会総会 2020. 10
35 並川努、前田将宏、横田啓一郎、谷岡信寿、藤澤和音、福留惟行、岩部純、宗景匡哉、上村直、前田広道、辻井茂宏、北川博之、岡本健、小林道也、花崎和弘	治癒切除不能進行胃癌に対する薬物治療中に発生した急性無石性胆嚢炎の1例	第56回日本腹部救急医学会総会 2020. 10
36 丸井輝、谷岡信寿、上村直、岡本健、前田将宏、横田啓一郎、津田祥、藤澤和音、福留惟行、宗景匡哉、岩部純、北川博之、前田広道、並川努、花崎和弘	特発性気腹症を来した偽性腸閉塞の1例	第56回日本腹部救急医学会総会 2020. 10
37 杉本健樹、中村衣世、小河真帆、駄場中研、花崎和弘	HER 2陽性乳癌でのPertuzumabを用いた術前化学療法の効果についての検討	第82回日本臨床外科学会総会 2020. 10
38 前田将宏、山口祥、横田啓一郎、谷岡信寿、藤澤和音、福留惟行、岩部純、上村直、宗景匡哉、前田広道、北川博之、岡本健、小林道也、花崎和弘	人工膵臓を用いた術後早期の至適血糖管理	第82回日本臨床外科学会総会 2020. 10 パネルディスカッション
39 北川博之、並川努、岩部純、横田啓一郎、前田将宏、上村直、宗景匡哉、花崎和弘	六君子湯の薬物動態試験からみた消化器外科領域における漢方薬の使用法	第82回日本臨床外科学会総会 2020. 10 ワークショップ
40 杉本健樹	HBOC 保険収載により遺伝性腫瘍および乳癌診療はどのように変わるのか	第8回日本乳房オンコプラスチックサージャリー学会総会 2020. 10 教育講演
41 岩部純、羽柴基、山田高義、北川博之、水田洋、内田一茂、佐藤隆幸、小林道也、花崎和弘	腹腔鏡下手術におけるインドシアニングリーン蛍光マーキングクリップの使用経験	日本蛍光ガイド手術研究会第3回学術集会 2020. 10
42 岩部純、羽柴基、山田高義、北川博之、水田洋、内田一茂、佐藤隆幸、小林道也、花崎和弘	腹腔鏡下手術におけるインドシアニングリーン蛍光マーキングクリップの使用経験	日本蛍光ガイド手術研究会第3回学術集会 2020. 10 学術セミナー
43 杉本健樹、中村衣世、小河真帆、駄場中研、花崎和弘	当院における早期乳癌でのセンチネルリンパ節生検症例の検討	日本蛍光ガイド手術研究会第3回学術集会 2020. 10 シンポジウム
44 北川博之、岩部純、横田啓一郎、前田将宏、並川努、花崎和弘	食道切除術胃管再建におけるICG蛍光法を用いた胃管血流境界の可視化	日本蛍光ガイド手術研究会第3回学術集会 2020. 10 ミニシンポジウム

著者名	演題タイトル	学会名
45 前田将宏、横田啓一郎、谷岡信寿、山口祥、藤澤和音、福留惟行、岩部純、宗景匡哉、上村直、前田広道、辻井茂宏、北川博之、岡本健、小林道也、花崎和弘	炎症栄養評価指数による治癒切除不能進行再発胃癌に対する免疫チェックポイント阻害剤治療の効果予測	JDDW 2020 第18回日本消化器外科学会大会 2020. 11
46 駄場中研、岡田衣世、山口祥、藤澤和音、花崎和弘	新しい腹部開放創用「ABTHERA ドレッシングキット」の使用経験	第28回日本消化器関連学会週間 2020. 11
47 花崎和弘	人工臓器研究の進歩と臨床展開：日本から世界へ発信する人工臓器学	第58回日本人工臓器学会大会 2020. 11 理事長・大会長講演
48 丸井輝、宗景匡哉、前田広道、上村直、清水茂翔、谷岡信寿、前田将宏、岩部純、岡本健、並川努、花崎和弘	人工膵臓の血糖連続測定から見た肝切除時の高血糖	第58回日本人工臓器学会大会 2020. 11
49 小河真帆、前田将宏、山口祥、横田啓一郎、岩部純、上村直、宗景匡哉、前田広道、北川博之、壬生季代、西尾裕華子、岡本健、山本奈緒、谷岡信寿、藤澤和音、福留惟行、辻井茂宏、小林道也、花崎和弘	腸音モニタリングシステムを用いた手術侵襲に伴う腸蠕動運動の評価	第58回日本人工臓器学会大会 2020. 11
50 藤澤和音、宗景匡哉、山本奈緒、壬生季代、上村直、清水茂翔、谷岡信寿、前田将宏、岩部純、岡本健、並川努、花崎和弘	人工膵臓療法における他職種連携の効果	第58回日本人工臓器学会大会 2020. 11 パネルディスカッション
51 並川努、中村衣世、前田将宏、山口祥、横田啓一郎、藤澤和音、岩部純、沖豊和、上村直、宗景匡哉、前田広道、北川博之、駄場中研、壬生季代、山本奈緒、西尾裕華子、杉本健樹、小林道也、花崎和弘	手術中における腸音モニタリングシステムを用いた腸蠕動運動の検討	第58回日本人工臓器学会大会 2020. 11
52 北川博之、岩部純、横田啓一郎、並川努、上村直、宗景匡哉、藤澤和音、前田将宏、花崎和弘	食道癌術後人工膵臓を用いた血糖管理と術後創感染の検討	第58回日本人工臓器学会大会 2020. 11 パネルディスカッション
53 宗景匡哉、前田広道、山本奈緒、西尾裕華子、壬生代、上村直、清水茂翔、前田将宏、横田啓一郎、山口祥、谷岡信寿、藤澤和音、北川博之、並川努、花崎和弘	高齢者における周術期人工膵臓療法の安全性	第58回日本人工臓器学会大会 2020. 11 パネルディスカッション
54 前田広道、横田啓一郎、山口祥、前田将宏、壬生季代、福留惟行、藤澤和音、丸井輝、岩部純、上村直、岡本健、並川努、花崎和弘	症例から考える多職種連携の重要性と難しさ	第58回日本人工臓器学会大会 2020. 11 パネルディスカッション

著者名	演題タイトル	学会名
55 宗景匡哉、前田広道、上村直、谷岡信寿、藤澤和音、清水茂翔、岩部純、北川博之、並川努、花崎和弘	コントロール不良糖尿病患者に対する肝切除周術期人工膵臓療法の有用性	第58回日本人工臓器学会 2020. 11 パネルディスカッション
56 清水茂翔、宗景匡哉、前田広道、上村直、谷岡信寿、藤澤和音、前田将宏、岩部純、北川博之、並川努、花崎和弘	人工膵臓療法中に観測された肝切除時片葉阻血法の安全性	第58回日本人工臓器学会 2020. 11
57 花崎和弘	地方大学外科教室が取り組む男女共同参画の推進	第75回日本消化器外科学会総会 2020. 12 AEGIS-Womenイベント
58 横田啓一郎、岩部純、上村直、宗景匡哉、前田広道、辻井茂宏、北川博之、小林道也、花崎和弘	二重エネルギー X線吸収測定法を用いた胃切除術後患者の骨塩量評価	第75回日本消化器外科学会総会 2020. 12
59 北川博之、岩部純、横田啓一郎、前田将宏、並川努、花崎和弘	食道癌に対する縦隔鏡下左上縦隔郭清先行胸腔鏡下食道切除術	第75回日本消化器外科学会総会 2020. 12 ワークショップ
60 杉本健樹	当院および高知県における遺伝性乳がん卵巣がん (HBOC) の院内・地域連携体制	第45回日本外科系連合学会学術集会 2020. 12 ワークショップ
61 前田将宏、横田啓一郎、谷岡信寿、山口祥、福留惟行、岩部純、宗景匡哉、上村直、前田広道、北川博之、駄場中研、岡本健、小林道也、花崎和弘	炎症栄養評価指数からみた治癒切除不能進行再発胃癌に対するTrastuzumab治療の評価	第52回日本臨床分子形態学会 総会・学術集会 2020. 12
62 花崎和弘	外科代謝栄養学からみた周術期管理の最前線	第57回日本外科代謝栄養学会 2020. 12 学術セミナー
63 Munekage M, Kitagawa H, Namikawa T, Hanazaki K	Effectiveness of glycemic control using artificial pancreas in hepatobiliary pancreatic surgery	第57回日本外科代謝栄養学会 2020. 12 シンポジウム
64 前田将宏、横田啓一郎、岩部純、上村直、宗景匡哉、前田広道、北川博之、小林道也、花崎和弘	胃転移を伴う食道癌の3例	第74回日本食道学会学術集会 2020. 12
65 北川博之、岩部純、横田啓一郎、前田将宏、並川努、花崎和弘	胸腔鏡下食道切除術における縦隔鏡操作を先行した左上縦隔郭清	第74回日本食道学会学術集会 2020. 12

会員名簿

[正会員]

氏名	勤務先	出身大学	卒業年
秋森 豊一	〒788-0785 高知県立幡多けんみん病院 高知県宿毛市山奈町芳奈 3-1 TEL:0880-66-2222 FAX:0880-66-2111	高知医科	昭和 63 年
荒木京二郎	〒780-8010 高知市棧橋通 6-9-5-1006 号	三重県立	昭和 41 年
安藤 徹	〒780-8535 社会医療法人仁生会 細木病院 緩和ケア科部長・外科 高知県高知市大膳町 37 TEL:088-822-7211 FAX:088-825-0909	高知医科	平成 3 年
飯田 千子	〒783-0005 医療法人藤原会 藤原病院 高知県南国市大桶乙 995 TEL:088-863-1212 FAX:088-863-5585	愛知医科	平成 13 年
石田 信子	〒788-0785 高知県立幡多けんみん病院 高知県宿毛市山奈町芳奈 3-1 TEL:0880-66-2222 FAX:0880-66-2111	高知	平成 28 年
井関 恒	〒780-8040 JCHO 高知西病院 外科 高知県高知市神田 317-12 TEL:088-843-1501 FAX:088-840-1096	岩手医科	昭和 50 年
市川 賢吾	〒500-8523 朝日大学病院 岐阜県岐阜市橋本町 3-23 TEL:058-253-8001 FAX:058-253-5165	高知医科	平成 15 年
伊与木増喜	〒781-1105 医療法人いよき会 伊与木クリニック 高知県土佐市蓮池 1227-5 TEL:088-828-5222 FAX:088-828-5223	高知医科	昭和 60 年
岩部 純	〒783-8505 高知大学医学部外科学講座外科 1 高知県南国市岡豊町小蓮 TEL:088-880-2370 FAX:088-880-2371	高知	平成 19 年
上村 直	〒783-8505 高知大学医学部外科学講座外科 1 高知県南国市岡豊町小蓮 TEL:088-880-2370 FAX:088-880-2371	高知	平成 18 年
白井 隆	〒781-6410 医療法人白井会 田野病院 高知県安芸郡田野町 1414-1 TEL:0887-38-7111 FAX:0887-38-5568	岡山	昭和 47 年
宇都宮正人	〒788-0785 高知県立幡多けんみん病院 高知県宿毛市山奈町芳奈 3-1 TEL:0880-66-2222 FAX:0880-66-2111	高知	平成 27 年
大木 章	〒780-0844 医療法人博信会 中ノ橋病院 外科 高知県高知市永国寺町 1-46 TEL:088-872-4069 FAX:088-872-4077	愛知医科	平成 8 年

氏名	勤務先	出身大学	卒業年
大畠 雅之	〒783-8505 高知大学医学部附属病院外科 高知県南国市岡豊町小蓮 TEL:088-880-2370 FAX:088-880-2371	長崎	昭和 61 年
大海研二郎	〒780-0051 医療法人新松田会 愛宕病院 外科 高知県高知市愛宕町 1 丁目 4 番 13 号 TEL:088-823-3301 FAX:088-871-0531	高知医科	平成 4 年
尾形 雅彦	〒781-5103 医療法人厚愛会 高知城東病院 外科 高知県高知市大津乙 719 TEL:088-866-2326 FAX:088-866-5365	高知医科	昭和 61 年
岡林 雄大	〒781-8555 高知医療センター 外科 高知県高知市池 2125-1 TEL:088-837-3000 FAX:088-837-6766	香川医科	平成 9 年
岡本 健	〒783-8505 高知大学医学部医療学講座医療管理学分野 高知県南国市岡豊町小蓮 TEL:088-880-2760 FAX:088-880-2702	高知医科	平成 4 年
小河 真帆	〒783-8505 高知大学医学部外科学講座外科 I (乳腺センター) 高知県南国市岡豊町小蓮 TEL:088-880-2139 FAX:088-880-2140	高知	平成 19 年
沖 豊和	〒783-8505 高知大学医学部外科学講座外科 I (乳腺センター) 高知県南国市岡豊町小蓮 TEL:088-880-2139 FAX:088-880-2140	高知	平成 19 年
尾崎 信三	〒780-8535 社会医療法人仁生会 細木病院 外科 高知県高知市大膳町 37 TEL:088-822-7211 FAX:088-825-0909	高知医科	平成 7 年
柏井 英助	〒781-1101 医療法人広正会 井上病院 高知県土佐市高岡町甲 2044 TEL:088-852-2131 FAX:088-852-2133	佐賀医科	平成元年
金子 昭	〒780-0824 医療法人高田会 高知記念病院 外科 高知県高知市城見町 4-13 TEL:088-883-4377 FAX:088-882-6261	山口	昭和 56 年
上岡 教人	〒788-0785 高知県総合保健協会 幡多健診センター 高知県宿毛市山奈町芳奈 3-9 TEL:0880-66-2800 FAX:0880-66-2801	信州	昭和 58 年
川西 泰広	〒788-0785 高知県立幡多けんみん病院 外科 高知県宿毛市山奈町芳奈 3-1 TEL:0880-66-2222 FAX:0880-66-2111	高知	平成 26 年
川村 達夫	〒780-8050 医療法人成仁会 快聖クリニック 高知県高知市鴨部 1085-1 TEL:088-850-0038 FAX:088-850-0120	日本	昭和 46 年
北川 尚史	〒780-0824 医療法人高田会 高知記念病院 外科 高知県高知市城見町 4-13 TEL:088-883-4377 FAX:088-882-6261	防衛医科	昭和 55 年

氏名	勤務先	出身大学	卒業年
北川 博之	〒783-8505 高知大学医学部外科学講座外科1 高知県南国市岡豊町小蓮 TEL:088-880-2370 FAX:088-880-2371	高知医科	平成15年
公文 正光	〒781-5213 医療法人公世会 野市中央病院 高知県香南市野市町東野555-18 TEL:0887-55-1101 FAX:0887-55-0177	群馬	昭和50年
久禮三子雄	〒596-0004 医療法人くれクリニック 大阪府岸和田市荒木町1-8-8 TEL:072-444-9014 FAX:072-444-9082	高知医科	昭和59年
計田 一法	〒787-0331 医療法人聖真会 渭南病院 外科 高知県土佐清水市越前町6-1 TEL:0880-82-1151 FAX:0880-82-0429	高知医科	昭和60年
小高 雅人	〒655-0031 医療法人薫風会 佐野病院 消化器がんセンター 兵庫県神戸市垂水区清水が丘2丁目5番1号 TEL:078-785-1000	高知医科	平成9年
小林 昭広	〒270-2251 社会医療法人木下会 千葉西総合病院 千葉県松戸市金ヶ作107-1 TEL:047-384-8111 FAX:047-384-9403	高知医科	平成5年
小林 道也	〒783-8505 高知大学医学部医療学講座医療管理学分野 高知県南国市岡豊町小蓮 TEL:088-880-2202 FAX:088-880-2702	高知医科	昭和59年
小松 優香	〒780-8522 社会医療法人近森会 近森病院 外科 高知県高知市大川筋1丁目1-16 TEL:088-822-5231 FAX:088-871-7429	高知	平成29年
近藤 雄二	〒780-0833 医療法人生生会 下村病院 高知県高知市南はりまや町1-7-15 TEL:088-882-7161 FAX:088-882-3634	高知医科	昭和60年
齋藤 卓	〒781-5213 医療法人公世会 野市中央病院 外科 高知県香南市野市町東野555-18 TEL:0887-55-1101 FAX:0887-55-0177	高知医科	平成12年
坂本 浩一	〒870-8511 大分県立病院 小児外科 大分市豊饒二丁目8番1号 TEL:097-546-7111・7112 FAX:097-546-0725	鹿児島	平成8年
志賀 舞	〒781-2193 いの町立国民健康保険仁淀病院 高知県吾川郡いの町1369 TEL:088-893-1551 FAX:088-893-4892	高知	平成18年
清水 茂翔	〒783-8505 高知大学医学部外科学講座外科1 高知県南国市岡豊町小蓮 TEL:088-880-2760 FAX:088-880-2702	高知	平成30年
白石 哲夫	〒781-6410 医療法人白井会 田野病院 外科 高知県安芸郡田野町1414-1 TEL:0887-38-7111 FAX:0887-38-5568	高知医科	昭和62年

氏名	勤務先	出身大学	卒業年
杉本 健樹	〒783-8505 高知大学医学部外科学講座外科1(乳腺センター) 高知県南国市岡豊町小蓮 TEL:088-880-2139 FAX:088-880-2140	高知医科	昭和60年
杉藤 正典	〒277-0803 医療法人社団葵会 千葉・柏たなか病院 消化器外科 千葉県柏市小青田1丁目3番地2 TEL:04-7131-4131 FAX:04-7133-3154	高知医科	昭和60年
高田 早苗	〒780-0824 医療法人高田会 高知記念病院 外科 高知県高知市城見町4-13 TEL:088-883-4377 FAX:088-882-6261	関西医科	昭和47年
高野 篤	〒780-0806 特定医療法人久会 函南病院 外科 高知県高知市知寄町1丁目5-15 TEL:088-882-3126 FAX:088-882-3128	高知医科	昭和62年
田島 幸一	〒781-8135 医療法人社団晴緑会 高知総合リハビリテーション病院 高知県高知市一宮南町1丁目10-15 TEL:088-845-1641 FAX:088-846-2811	徳島	昭和48年
田中 智規	〒780-8522 社会医療法人近森会 近森病院 外科 高知県高知市大川筋1丁目1-16 TEL:088-822-5231 FAX:088-871-7429	高知	平成30年
谷岡 信寿	〒783-8505 高知大学医学部外科学講座外科1 高知県南国市岡豊町小蓮 TEL:088-880-2370 FAX:088-880-2371	高知	平成26年
谷口 寛	〒720-0802 医療法人社団健生会 いそだ病院 外科 広島県福山市松浜町1丁目13-38 TEL:084-922-3346 FAX:084-923-0531	高知医科	平成5年
駄場中 研	〒783-8505 高知大学医学部外科学講座外科1 高知県南国市岡豊町小蓮 TEL:088-880-2370 FAX:088-880-2371	高知医科	平成5年
田村 耕平	〒785-0036 医療法人五月会 須崎くろしお病院 外科 高知県須崎市緑町4番30号 TEL:0889-43-2121 FAX:0889-42-1582	島根医科	平成12年
田村 精平	〒785-0036 医療法人五月会 須崎くろしお病院 高知県須崎市緑町4番30号 TEL:0889-43-2121 FAX:0889-42-1582	岡山	昭和47年
辻井 茂宏	〒783-8505 高知大学医学部外科学講座外科1 高知県南国市岡豊町小蓮 TEL:088-880-2370 FAX:088-880-2371	徳島	平成16年
津田 晋	〒780-8522 社会医療法人近森会 近森病院 外科 高知県高知市大川筋1丁目1-16 TEL:088-822-5231 FAX:088-871-7429	高知	平成26年
都築 英雄	〒783-8509 JA高知病院 外科 高知県南国市明見字中野526-1 TEL:088-863-2181 FAX:088-863-2186	徳島	昭和62年

氏名	勤務先	出身大学	卒業年
西家佐吉子	〒780-0066 医療法人仁栄会 島津病院 外科 高知県高知市比島町4丁目6番22号 TEL:088-823-2285 FAX:088-824-2363	川崎医科	平成14年
直木 一朗	〒784-0027 高知県立あき総合病院 外科 高知県安芸市宝永町1-32 TEL:0887-34-3111 FAX:0887-34-2687	高知医科	平成3年
中谷 肇	〒569-0046 うえだ下田部病院 大阪府高槻市登町33番1号 TEL:072-673-7722 FAX:072-673-8656	高知医科	平成10年
中野 琢巳	〒362-0001 北上尾クリニック 埼玉県上尾市上144番地2 TEL:048-779-2111	高知医科	昭和62年
永野 克二	〒880-0853 慈英病院 宮崎県宮崎市中西町160番地	高知医科	平成8年
中村 衣世	〒783-8505 高知大学医学部外科学講座外科1 高知県南国市岡豊町小蓮 TEL:088-880-2760 FAX:088-880-2702	高知	平成29年
中村 生也	〒787-0010 さくらクリニック 高知県四万十市古津賀1463 TEL:0880-35-2555 FAX:0880-35-2572	高知医科	昭和63年
並川 努	〒783-8505 高知大学医学部外科学講座外科1 高知県南国市岡豊町小蓮 TEL:088-880-2370 FAX:088-880-2371	高知医科	平成3年
橋詰 直樹	〒830-0011 久留米大学医学部外科学講座 小児外科部門 福岡県久留米市旭町67 TEL:0942-31-7631 FAX:0942-31-7705	高知	平成19年
橋本 祥恪	〒781-1101 医療法人桔梗ヶ丘会 橋本外科胃腸科内科 高知県土佐市高岡町甲750-1 TEL:088-852-5522 FAX:088-852-5305	日本	昭和59年
花崎 和弘	〒783-8505 高知大学医学部外科学講座外科1 高知県南国市岡豊町小蓮 TEL:088-880-2370 FAX:088-880-2371	新潟	昭和59年
濱里 真二	〒782-0035 医療法人同仁会 同仁病院 高知県香美市土佐山田町百石町2-5-20 TEL:0887-53-3155 FAX:0887-53-3096	長崎	昭和57年
濱田 伸一	〒786-0002 医療法人川村会 くぼかわ病院 外科 高知県高岡郡四万十町見付902-1 TEL:0880-22-1111 FAX:0880-22-1166	高知医科	昭和61年
曳田 知紀		宮崎医科	昭和55年
福留 惟行	〒783-8505 高知大学医学部外科学講座外科1 高知県南国市岡豊町小蓮 TEL:088-880-2370 FAX:088-880-2371	高知	平成20年

氏名	勤務先	出身大学	卒業年
藤枝 悠希	〒650-0047 兵庫県立こども病院 神戸市中央区港島南町1丁目6-7 TEL:078-945-7300 FAX:078-302-1023	高知	平成26年
藤澤 和音	〒783-8505 高知大学医学部外科学講座外科1 高知県南国市岡豊町小蓮 TEL:088-880-2370 FAX:088-880-2371	高知	平成25年
船越 拓	〒781-0011 医療法人防治会 いずみの病院 外科 高知県高知市薊野北町2丁目10番53号 TEL:088-826-5511 FAX:088-826-5510	高知	平成18年
古屋 泰雄	〒711-0906 松田外科胃腸科医院 岡山県倉敷市児島下の町9-11-30 TEL:086-472-7383	高知医科	昭和62年
別府 敬		高知医科	昭和63年
甫喜本憲弘	〒780-8562 高知赤十字病院 第二外科 高知県高知市新本町2-13-51 TEL:088-822-1201 FAX:088-822-1056	高知医科	平成11年
前田 広道	〒783-8505 高知大学医学部外科学講座外科1 高知県南国市岡豊町小蓮 TEL:088-880-2760 FAX:088-880-2702	高知医科	平成16年
前田 将宏	〒783-8505 高知大学医学部外科学講座外科1 高知県南国市岡豊町小蓮 TEL:088-880-2760 FAX:088-880-2702	高知	平成29年
松浦喜美夫	〒781-2193 高知学園大学 健康科学部・管理栄養学科 高知市旭天神町292-26 TEL:088-840-1121 FAX:088-840-1123	弘前	昭和49年
松森 保道	〒781-1101 土佐市立土佐市民病院 高知県土佐市高岡町甲1867 TEL:088-852-2151 FAX:088-852-3549	徳島	平成2年
丸井 輝	〒783-8505 高知大学医学部外科学講座外科1 高知県南国市岡豊町小蓮 TEL:088-880-2760 FAX:088-880-2702	高知	平成30年
水嶋 秀	〒603-8002 医療法人浜田会 洛北病院 内科 京都府京都市北区上賀茂神山6	高知医科	平成5年
溝淵 敏水	〒787-0331 医療法人聖真会 渭南病院 高知県土佐清水市越前町6-1 TEL:0880-82-1151 FAX:0880-82-0429	東京慈恵医科	平成6年
宗景 絵里	〒781-2193 いの町立国民健康保険仁淀病院 高知県吾川郡いの町1369 TEL:088-893-1551 FAX:088-893-4892	神戸	平成21年
宗景 匡哉	〒783-8505 高知大学医学部外科学講座外科1 高知県南国市岡豊町小蓮 TEL:088-880-2760 FAX:088-880-2702	高知	平成19年

氏名	勤務先	出身大学	卒業年
森 一水	〒781-1101 土佐市立土佐市民病院 高知県土佐市高岡町甲 1867 TEL:088-852-2151 FAX:088-852-3549	徳島	昭和 48 年
森田 雅夫	〒785-8501 医療法人五月会 須崎くろしお病院 外科 高知県須崎市緑町 4 番 30 号 TEL:0889-43-2121 FAX:0889-42-1582	高知医科	昭和 62 年
安原 清司	〒780-0901 医療法人三和会 国吉病院 消化器外科 高知県高知市上町 1-3-4 TEL:088-875-0231	山口	平成 2 年
山口 祥	〒783-8505 高知大学医学部外科学講座外科 1 高知県南国市岡豊町小蓮 TEL:088-880-2370 FAX:088-880-2371	高知	平成 26 年
山崎 奨	〒781-1301 医療法人 山秀会 山崎外科整形外科病院 高知県高岡郡越知町越知甲 2107-1 TEL:0889-26-1136 FAX:0889-26-1799	杏林	昭和 54 年
山中 康明	〒781-5213 医療法人公世会 野市中央病院 リハビリテーション科 高知県香南市野市町東野 555-18 TEL:0887-55-1101 FAX:0887-55-0177	金沢医科	昭和 55 年
山本 真也	〒783-0022 社会福祉法人土佐希望の家 土佐希望の家 高知県南国市小籠 107 TEL:088-863-2131 FAX:088-863-2133	高知医科	平成元年
山本 拓	〒781-1103 医療法人 杏クリニック 高知県土佐市高岡町丙 64-1 TEL:088-856-6300 FAX:088-856-6301	杏林	昭和 62 年
山本 恒義	〒780-0901 高知県高知市上町 1-10-39	弘前	昭和 50 年
吉本 忠	〒780-8121 医療法人山口会 高知厚生病院 消化器外科 高知県高知市葛島 1 丁目 9-50 TEL:088-882-6205 FAX:088-883-1655	高知医科	平成 3 年
横田啓一郎	〒783-8505 高知大学医学部外科学講座外科 1 高知県南国市岡豊町小蓮 TEL:088-880-2760 FAX:088-880-2702	高知	平成 26 年

[特別会員]

氏名	勤務先	出身大学	卒業年
安藝 史典	〒780-0085 伊藤外科乳腺クリニック 高知県高知市札場 12-10 TEL:088-883-6868 FAX:088-883-6879	広島	平成 6 年
内海 善夫	〒780-0051 医療法人新松田会 愛宕病院 高知県高知市愛宕町 1 丁目 4 番 13 号 TEL:088-823-3301 FAX:088-871-0531	鳥取	昭和 57 年

氏名	勤務先	出身大学	卒業年
宇都宮博史	〒780-0844 医療法人博信会 中ノ橋病院 高知県高知市永国寺町 1-46 TEL:088-872-4069 FAX:088-872-4077	日本	昭和 53 年
岡 瑛世	〒783-0005 医療法人藤原会 藤原病院 高知県南国市大桶乙 995 TEL:088-864-1092 FAX:088-863-7173	北里	平成 22 年
岡添 友洋	〒780-0963 高知医療生活協同組合 高知生協病院 外科 高知県高知市口細山 206-9 TEL:088-840-0123 FAX:088-820-0409	藤田保健衛生	平成 19 年
岡林 敏彦	〒780-8040 医療法人弘仁会 岡林病院 高知県高知市神田 598-1 TEL:088-832-8821 FAX:088-832-8878	東北	昭和 37 年
小野二三雄	〒781-5102 医療法人小野会 おの肛門科胃腸科外科 高知県高知市大津甲 560-2 TEL:088-866-5500 FAX:088-866-2777	東京医科	昭和 47 年
上地 一平	〒780-8535 社会医療法人仁生会 細木病院 外科 高知県高知市大膳町 37 088-822-7211 FAX:088-825-0909	昭和	昭和 61 年
川村 貴範	〒780-0963 高知医療生活協同組合 高知生協病院 高知県高知市口細山 206-9 TEL:088-840-0123 FAX:088-820-0409	高知医科	平成 2 年
北村 嘉男	〒781-2110 医療法人光陽会 いの病院 高知県吾川郡いの町 3864 番地 1 TEL:088-893-0047 FAX:088-893-1250	徳島	昭和 43 年
公文 龍也	〒781-5213 医療法人公世会 野市中央病院 高知県香南市野市町東野 555-18 TEL:0887-55-1101 FAX:0887-55-0177	岡山	平成 17 年
桑原 和則	〒780-8040 JCHO 高知西病院 高知県高知市神田 317-12 TEL:088-843-1501 FAX:088-840-1096	日本医科	昭和 43 年
桑原 道郎	〒788-0785 高知県立幡多けんみん病院 外科 高知県宿毛市山奈町芳奈 3-1 TEL:0880-66-2222 FAX:0880-66-2111	京都府立医科	平成 5 年
古賀真紀子	〒781-3521 医療法人十全会 早明浦病院 高知県土佐郡土佐町田井 1372 TEL:0887-82-0456 FAX:0887-82-2902	日本	昭和 57 年
島津 栄一	〒780-0066 医療法人仁栄会 島津病院 高知県高知市比島町 4 丁目 6 番 22 号 TEL:088-823-2285 FAX:088-824-2363	岐阜	昭和 44 年
島本 政明	〒780-0841 医療法人島本慈愛会 島本病院 高知県高知市帯屋町 2-6-3 TEL:088-873-6131 FAX:088-873-6131	日本医科	昭和 44 年

氏名	勤務先	出身大学	卒業年
高橋 淳二	〒780-0051 医療法人悠仁会 高橋病院 高知県高知市愛宕町 3丁目 9-20 TEL:088-822-1616 FAX:088-822-3530	徳島	昭和 29 年
竹下 篤範	〒780-0863 医療法人竹下会 竹下病院 高知県高知市与力町 2丁目 3番 8号 TEL:088-822-2371 FAX:088-822-2375	日本医科	昭和 40 年
竹増 公明	〒799-3202 たけます診療所 愛媛県伊予市双海町上灘甲 5350 番地 16 TEL:089-986-0909	愛媛	昭和 62 年
田中 誠	〒780-0901 医療法人産研会 上町病院 高知県高知市上町 1丁目 7番 34号 TEL:088-823-3271 FAX:088-823-3275	三重県立	昭和 46 年
近森 正幸	〒780-0052 社会医療法人近森会 高知県高知市大川筋 1丁目 1-16 TEL:088-822-5231 FAX:088-872-3059	大阪医科	昭和 47 年
次田 靖生	〒787-0303 医療法人次田会 足摺病院 高知県土佐清水市旭町 18-71 TEL:0880-82-1275 FAX:0880-82-5585	昭和医科	昭和 35 年
徳丸 哲平	〒890-0062 社会医療法人緑泉会 米盛病院 鹿児島市与次郎 1丁目 7番 1号 TEL:099-230-0100 FAX:099-230-0101	山口	平成 17 年
長田 裕典	〒781-0011 医療法人防治会 いずみの病院 外科 高知県高知市薊野北町 2丁目 10番 53号 TEL:088-826-5511 FAX:088-826-5510	岡山	昭和 57 年
久 直史	〒780-0806 特定医療法人 久会 凶南病院 高知県高知市知寄町 1丁目 5-15 TEL:088-882-3126 FAX:088-882-3128	慶應義塾	昭和 50 年
細木 秀美	〒780-8535 社会医療法人仁生会 高知県高知市大膳町 37 TEL:088-820-4100	東京医科	昭和 42 年
堀見 忠司	〒780-8535 社会医療法人仁生会 細木病院 高知県高知市大膳町 37 TEL:088-820-4100	京都府立医科	昭和 45 年

[名誉会員]

氏名	勤務先	出身大学	卒業年
溝淵 玲子	〒787-0331 医療法人 聖真会 渭南病院 高知県土佐清水市越前町 6-1 TEL:0880-82-1151 FAX:0880-82-0429	東京慈恵医科	昭和 40 年
味村 俊樹	〒329-0498 自治医科大学消化器・一般外科学 栃木県下野市薬師寺 3311-1 TEL:0285-44-2111 FAX:0285-44-8169	東京	昭和 63 年

氏名	勤務先	出身大学	卒業年
村山 正毅	〒740-0034 医療法人岩国みなみ病院 外科 山口県岩国市南岩国町2丁目77番23号 TEL:0827-32-4100 FAX:0827-32-4105	岡山	昭和42年
山本 浩志	〒783-0011 医療法人地塩会 南国中央病院 高知県南国市後免町3丁目1-27 TEL:088-864-0001 FAX:088-864-0332	東京医科	昭和47年
夕部 富三	〒781-0011 医療法人防治会 いずみの病院 高知県高知市薊野北町2丁目10番53号 TEL:088-826-5511 FAX:088-826-5510	自治医科	昭和53年
石黒 晴久	〒781-1101 医療法人広正会 井上病院 高知県土佐市高岡町甲2044 TEL:088-852-2131 FAX:088-852-2133	杏林	平成14年
くぼかわ病院	〒786-0002 医療法人川村会 くぼかわ病院 外科 高知県高岡郡四万十町見付902-1 TEL:0880-22-1111 FAX:0880-22-1166		

[物故会員]

氏名	出身大学	卒業年	逝去年月日
緒方 卓郎	岡山大学	昭和29年	平成20年 1月30日
吉川 健	獨協医科大学	昭和61年	平成20年 3月10日
清藤 敬	岡山大学	昭和36年	平成20年 5月1日
寺田 紘一	鳥取大学	昭和41年	平成20年 6月29日
泉山 史貴	杏林大学	平成3年	平成21年 1月12日
阿部 哲朗	高知医科大学	昭和59年	平成22年 6月2日
井上 廣	長崎医科大学	昭和19年	平成23年 6月23日
半田 祐彦			平成24年 5月9日
溝渕南海郎			平成26年 8月18日
川村 明廣	大阪医科大学	昭和53年	平成28年 12月21日
福本 和生	医療法人社団樹人会北条病院	昭和58年	平成33年 5月15日

高知大学医学部外科学講座外科一教室同門会会則

第1条（名称）

第1項 本会は、高知大学医学部外科学講座外科一階風会（以下「本会」）と称する。

第2条（目的）

第1項 本会は会員相互の親睦を図り、かつ知見の増進に努めることを目的とする。

第3条（会員）

第1項 会員は以下の者をもって構成される。

1. 高知医科大学第一外科教室および高知大学医学部外科学講座外科一教室の出身者ならびに現教室員とする。

第2項 特別会員は、正会員以外で本会の主旨に賛同し、所定の会費を納入する者。

第3項 会員は、本会の目的に賛同し、総会で承認された者とする。

第4条（組織）

第1項 本会は次の役員を置き、本会の運営にあたる。

1. 会長1名、理事3名、幹事3名、会計監事2名

第5条（役員）

第1項 名誉会長は前会長とする。

第2項 会長は高知大学医学部外科学講座外科一教室の教授とする。

第3項 理事は会長が推薦し、総会によって承認する。

第4項 幹事は会長が推薦し、一般会務の処理を行う。

第5項 会計監事は会長が推薦し、一般会計の監査を行う。

第6項 役員任期は2年とする。ただし再任を妨げない。

第6条（役員会）

第1項 役員会は、本会の運営に関する事項について協議決定する。

第2項 役員会は、会長が必要と定めた時、または役員より要請があった時に召集する。

第7条（総会）

第1項 本会は、年1回定例総会を開催する。

第8条（会計）

第1項 本会の会計は年会費および寄附金等により運営する。

第2項 年会費は細則で定める。

第3項 会計年度は、4月1日より翌年3月31日までとする。

第9条（退会）

第1項 会員が死亡したとき。

第2項 会員が退会を希望し、総会で承認されたとき。

第10条（除名）

第1項 会員が以下に該当するときは、総会の議決を経て会長が除名することができる。

1. 会員としての義務を怠ったとき。
2. 本会の名誉を著しく傷つけたとき。
3. その他、上記以外に除名に該当する言動があったとき。

第11条（事業）

第1項 本会は以下の事業を行う。

1. 会報の刊行。
2. 高知大学医学部外科学講座外科一教室の活動の援助。
3. その他、第2条の目的を達成するために必要な事業。

第12条（会則の変更）

第1項 本会則は、総会出席者の過半数の賛成により変更することができる。

第13条（事務局）

第1項 本会の事務局は、高知県南国市岡豊町小蓮 高知大学医学部外科学講座外科一教室内に置く。

第2項 事務局は本会の庶務一般、会費の徴収、会計事務等を行う。

附則

1. 役員は本会の円滑な運営を計るため、必要に応じて細則を定めることができる。

細則

1. 年会費は以下の通りとする。
 - 1) 正会員は年8,000円。
 - 2) 特別会は年5,000円。

この会則の改定は、平成30年5月12日より施行する。

高知大学医学部外科学講座外科一教室同門会役員

(平成 30 年 5 月 12 日)

会 長	花崎 和弘
理 事	島津 栄一
理 事	小林 道也
理 事	並川 努
幹 事	杉本 健樹
幹 事	駄場中 研
幹 事	北川 博之
会計監事	田村 精平
会計監事	公文 正光

[事務局]

高知大学医学部外科学講座外科一教室

編集後記

「義理と人情」

義理と人情で思い出すのは、村田英雄が歌って大ヒットした昭和の名曲「人生劇場」だ。
♪ 義理がすたればこの世は闇だ。なまじとめるな夜の雨 ♪ 生前父親が「王将」「ああ上野駅」と共に、宴会の十八番として歌っていた。

義理の「義」について広辞苑で調べてみると、義とは「よい」「ただしい」とされる概念であると書かれている。また義理と人情を兼ね備えた「義人」とは「堅く正義を守る人。わが身の利害をかえりみずに他人のために尽くす人」とある。現代風にわかりやすく例えると、2020年のテレビドラマで堺雅人が主演して高視聴率を獲得した「半沢直樹」みたいな人を義人と呼ぶのだろうか（残念ながら筆者は最終回しかみていない）。

「第一義」を唱えた戦国時代の武将上杉謙信は「義人」として名高い。真偽はともかくとして、小生の先祖は上杉謙信に仕えた家来だったらしい。槍の使い手だったとの言い伝えも残っている。我が家の守り神は毘沙門天と並んで上杉謙信が信仰した不動明王である。

絶対君主の戦国時代に新潟県東頸城郡花崎村を在所とした「花崎家」の人々は「義」を重んじながら、今日死ぬか、明日死ぬかみたいな時代を必死に生き抜いていったに違いない。およそ500年の時を経た現在の子孫である私のふるまいはどうだろうか？私利私欲にばかり走っていないか？少しでも他人のために尽くしているか？「義を見てせざるは勇無きなり」で義を尽くすべき時に知らん顔をして逃げ回っていないか？我が家の守り神「不動明王」に祈る時、我が身を振り返る。

長い年月と多くの労力を要し築き上げたにも関わらず、それまで良好だったはずの人間関係が義理を欠いた瞬間、あっという間に崩れ去ることもある。こうした事態を避けるために、「義」を疎かにしない生き方を心がけたい。

2020年は新型コロナウイルス感染症との戦いの年であった。コロナ禍での生活、ほとんどの日本人が自己防衛としてだけでなく、他人への感染拡大を防ぐためにも3密の回避、マスクの着用、手洗いの励行等、他人に配慮しながらNew Normal時代にマッチした日常生活を営んでいる。こうした行為の積み重ねが、他人のために尽くす、「義人」になるための第一歩かもしれない。失業者や自殺者が増加中のコロナ禍の今だからこそ、昔から日本人が大切にしてきた「義理と人情」を発揮してお互いを思い遣りたい。

一日も早く新型コロナウイルス感染症が終息し、face to faceが当たり前だった頃の日常生活を取り戻せたらと願う。

最後に、2006年4月1日小生の教授就任以来15年間継続してきた高知大学外科学講座外科1同門会誌「楷風」ですが、今回の15号が最終号になります。来年度からは「統合外科学講座の同門会誌（仮称）」が新しく発刊される予定です。長い間「楷風」をご愛読いただき、誠にありがとうございました。心より感謝申し上げます。

2020年11月15日 花崎和弘

同門会誌 楷風 (年報) 第 15 号

発行人 花崎 和弘
発行所 高知大学医学部外科学講座外科 1 同門会
〒783-8505 高知県南国市岡豊町小蓮
令和 3 年 5 月発行
印刷・製本 株式会社リーブル

医局のホームページも是非ご覧ください♪
http://www.kochi-ms.ac.jp/~fm_srg1/index.html



